

# 亡命と回帰

——シャトブリアンによる祖国の発見——

大野 英二郎

シャトブリアンが横切った八〇年にわたる時代は波乱に満ちあふれていた。したがって彼の人生行路も曲折に富み、膨大な著作もまた変化と矛盾を内包しないものではありえなかった。この文人・政治家が頑迷一徹な反動的王党派であったとする謬見は払拭されたが、昨今では開明的保守主義者として位置づけて、自由の実現を追求し続けたことを彼の政治的同一性として強調する傾向が強まっている。<sup>(1)</sup>しかしながら七月革命後にはシャルル十世に殉じて政界引退を決意するように、正統王権の擁護は、疑いもなく、彼の政治行動を規定するもう一つの定点であった。その考え方は、例えば一八三一年に発表された文に鮮明に表されている。

「フランスにおいて正統王権は千年にわたる歴史の産物である。(……) 旧来の正統王権は一家系の中に具現化されて、維持されてきた国民の意思なのである。この正統性の力はきわめて強大であるからこそ、それが途絶したときに、社会の基礎が潰え、政治の根幹が揺らいだのである。<sup>(2)</sup>」

シャトブリアンにとって国王はフランスの存在そのものを意味していた。そしてフランスこそが彼の祖国なのであった。彼の愛国的言辭は枚挙にいとまがないが、例えば一八二六年の全集「総序文」では、自身と祖国の

閱歴を振り返って、

「おおフランス、わが愛しき国、わが初恋。あなたの息子の一人が、人生の暮れ方に、あなたの母性的慈愛に負っている証をここにまとめてご覧にいきます。彼がもはやあなたに何もなしえなかつても、あなたの宗教と国王と自由に対する彼の献身が快いものであったときさえ仰有っていただければ、彼にとつてそれにすぐるものはございません。気高く美しき祖国よ、私が僅かな栄光を望んだにしても、それはあなたの栄光をいや増すために他なりませんでした<sup>(3)</sup>」

と、長年捧げてきた熱き思いを歌い上げている。

あるいはまた生涯にわたって烈々たる対抗意識を抱き続けたことで知られるナポレオンに対するとき、彼はフランス人としての自己同一性を最大限に利用する。一八一三年一〇月に執筆され、一八一四年四月四日、ナポレオン退位を目前にして刊行された『ブオナパルテとブルボン王朝』における基本的論理は、ナポレオンを「潜主、篡奪者」と非難して、その姓を「ブオナパルテ」と綴ってイタリア色を強調し、執拗なまでに「コルシカ人」あるいは「外国人」と位置づけ、徹底的にフランスから排斥しようとするものであった<sup>(4)</sup>。このように「外国人」を排除する政治的方向性によって、国家フランスは明確な輪郭を取り、均質な空間として提示されることになる。つまりフランスとは元来、父祖的権威によって構成された共同体なのであって、伝統、歴史、文化などを内包するその権威はブルボン王朝によって体现されていた。だがそれらすべてよきものは革命と「ブオナパルテ」によって破壊されてしまった。フランスはもはや陰画として存在するに過ぎない。蛮行と潜主によって犠牲にされた側に著者自身も属していたとすれば、彼の同一性を保証する帰属関係は大きく損なわれることになったのであろうか。あるいはその損失によって一層明確になったというべきであらうか。

しかしこのようなシャトブリアンの祖国観および帰属意識は生得のものでもなければ、一朝一夕に形成された訳でもなかった。彼の思考がしばしば情緒的な次元での衝動ないしは性向に引きずられて生成変化することが多かっただけに、時代の状況を反映させながら、その祖国観も変質した。変転きわまりない情勢、滔々たる歴史の流れの中で、彼は自己をどのように位置づけ、祖国をどのように捉えていたのであろうか。若き日、革命の動乱を避けるようにしてアメリカに赴いたとき、彼は故郷に対していかなる感情を抱いていたのであろうか。またロンドンで亡命者の悲惨を味わったとき、祖国をどう思い描いていたのであろうか。彼の創作作品はいずれも故国の喪失あるいは望郷の念が主題をなしているとさえいえる。そのような作品群はたしてシャトブリアン自身の意識とどのような関係を持っていたのであろうか。

本論では彼の祖国概念について、特にその形成過程を中心に観察を試みる。年代としては一八〇二年『キリスト教精髓』が刊行されるまでを一応の区切りとする。

\* \* \*

フランソワ・ルネ・ド・シャトブリアンは一七六八年ブルターニュ地方サン・マロで生を享けた。幼年時代を過ごしたコンブール共々、この地方は彼の想像力の中で特権的位置を占めつづけることになる。しかるにブルターニュ地方は八四五年から主権国家を構成しており、フランスに併合されたのは一五二三年のことであった。固有の文化とそれに対する住民の矜持については説明するまでもない。当然、パリを中心とする国家フランスに対するブルターニュ地方人の立場は複雑であって、反感ともいべき心的傾向が根強<sup>(5)</sup>かった。シャトブ

リアンにとってフランスは自己を賭すべき対象として当初から存在していた訳ではなかったのである。

もっとも彼が生まれ育ったサン・マロ周辺が、ブルターニュのすべてであったわけではない。後年彼がブルトンつまりブルターニュ地方人としての自己同一性を強調したとしても、一港町とそれを包含する地方の間にはかなりの径庭があって、地方なるものが既にある種の観念性を帯びたものであることを忘れてはならないであろう。彼が現実**に強く結びつけられていたのがサン・マロとコンブール**一帯に限られていたことは明らかである。そしてこの土地が海辺あるいは港に位置していたために、故郷自体が出発という少なからず超越的な主題と結びつくことにもなるのだった。故郷において育まれたシャトブリアンの想像力は必然的に彼方への航海へ、出発へと誘なわれるのであった。たとえば幼少時代コンブールの城の窓から眺めたツバメの姿は、彼方への憧れと自由を象徴するものとして彼のテキストに繰り返し現れるであろう。出発の主題が彼の原風景を支配していることは、その『墓の彼方からの回想』(以下原則として『回想』と略記<sup>(6)</sup>)にも明らかである。この問題についてはすでに幾多の研究がなされて、港を出発に結びつける図式は陳腐になったとさえ思えるが、つけ加えなければならぬのは港はまた帰還の場でもあるということであろう。母港に戻ることは彼にとって人生の終焉を意味したのである<sup>(7)</sup>か。シャトブリアンは一八二三年に遺言で墓所をサン・マロの沖グラン・ベ島に指定し、一八四八年に没すると、言葉通り、大西洋の潮風が吹きすさぶ小島に埋葬されたのであった。しかしそれまでの間、現実の故郷に対して彼は冷淡と思われるほどの行動をとっている。文章の中では頻繁に故郷を語り、懐旧の情に浸ったのに対して、実際に故郷へ足を運ぶことはなかったのである。近親者の慫慂に対しても言を左右して帰郷しない。それは故郷に対する心理の微妙な変質を物語るものであったかもしれない。

地方への強い愛着は翻って中央への反発となる。若き日のシャトブリアンがパリの人士や風俗に対してきわ

めて批判的な感情を抱いていたことは、たとえば、『我が人生の回想』に詳細に記されている。この私的回想が後年新たな構想の下に書き直されて、浩瀚な『墓の彼方からの回想』としてまとめられると、全体を通じて祖国としての国家フランスがより強調されることになるが、幼年期には同様の愛郷心が説明される。政治性が露わになった後者の著作もまた、ブルターニュ人の間に存在していたパリへの反感を物語っている以上、それが少年の実感であったと判断して差し支えないであろう。——そもそもシャトブリアンの生涯を追尋する場合、そのあまりにも雄弁な回想録によって眩惑されないことが肝要である。作家が自己の軌跡の上に築き上げた大伽藍と、過去の実体験は峻別されなければならない。<sup>(8)</sup>

しかるに少年シャトブリアンに対して、パリの存在は父親を通じて説明されていた。

「父はパリを訪れたことがあった。そしてパリについてはおぞましい場所として、またはるかに遠い異郷として語るのだった。ブルターニュ人たちは中国を近隣の土地のように考えるが、パリについては世界の果てに存在していると思っていた。<sup>(9)</sup>」

しかも父親はフランス中央に対して拭いがたい敵意を抱いていた。シャトブリアン家の起源はウィリアムないしはギョーム征服王の臣下にまで遡り、聖ルイの忠臣として十字軍に加わって赫々たる武勲を誇る家柄であった。その後一族は直系が断絶し、零落する。しかし王家から援助の手はさしのべられなかった。それゆえフランス中央に対するきわめて屈折した感情が生じたのであった。<sup>(10)</sup> 独力で家系の復興を遂げ、コンブール城館を所有するに至った彼の父親には特に家系に対する執着とフロンド的傾向が顕著であった。

「ただ一つの情熱が私の父を支配していた。自己の名に対する情熱である。<sup>(11)</sup>」

反中央感情はブルターニュ地方の貴族に共通していた。単なる気風のみならず、制度的な面では、たとえば

フランスに併合される際の合意によって、国王による課税も地方三部会の承認を得ることが必要とされていた。実際、一七五三年ルイ一五世が新規課税を実施しようとする、貴族は三部会の全会一致の原則などを楯に承認を拒んで徹底的に抵抗を続けている。<sup>(12)</sup>ほとんどが領主貴族で、さしたる富をも所有せず、ヴェルサイユに参内することすらかなわない彼らの中に、宮廷ないしは宮廷貴族に対する反感が根強かったのは当然でもあろう。<sup>(13)</sup>ブルターニュおよびコンブルにおける困窮と劣悪な生活水準については、一八世紀末にフランスを旅行したイギリスの農学者アーサー・ヤングによっても記録されている。<sup>(14)</sup>

「父はブルターニュ人の血によって政治的にフロンドとなり、徴税に対する頑固な反対者となり、宮廷に対する過激な敵となった。<sup>(15)</sup>」

シャトブリアンの父親はブルターニュ貴族の典型であったともいえるだろう。そしてこの否定的感情あるいは特異な地方意識は、息子へと受け継がれたのである。したがってシャトブリアン自身がフロンド的であったと回想する時、それは何よりブルターニュ人としての矜持と一族の失われた栄光を誇示するものであったといふべきであろう。彼の周辺とパリの間に違和感ないしは不信感が存在したのは当然の結果である。

「父が誕生した頃、軍務につくブルターニュ人はほとんどいなかった。(……)ブルターニュ人の軍務に対する反感は革命勃発時もお一部残っていた。フランス国王の軍隊でわれわれはいつも異邦人であると感じていたのである。<sup>(16)</sup>」

少年フランソワールネはブルターニュ地方への帰属を強く感じていたのであって、その意識は晩年に至るまで完全に消滅することはなかった。<sup>(17)</sup>

シャトブリアンは一七八七年二月パリに上京する。兄の推挽でヴェルサイユ参内を果たし、宮廷人にはある

まじき失策をおかしたことから、狩猟中の国王から直接言葉を賜るのだった。それが彼にとってルイ一六世を咫尺に拝する最初で最後の機会であった。『回想』では、これらの経過はすべて田舎から出てきた青年貴族の不得要領な行動として散文的に語られて、国王に関する叙述にはいささかの昂揚も伴わない。彼の回顧的文章には、正統王権主義者としての言説としての色合いが濃いのが、国王についての冷淡な記述はその基本的立場に相反する点で異質であり、青年シャトブリアンの感情をより直截に表現するものと解釈してよいであろう。<sup>(18)</sup>すなわち革命以前の宮廷体験は、彼のフロンド的感情を変化させるものではありえなかった。

ブルターニュでは反中央傾向が次第に強まり、一七八八年にはレンヌの地方三部会で暴力的騒乱事件が勃発、貴族から犠牲者を出すに至る。バステューユ攻撃へと連なる激動の幕開きである。このような情勢の変化がシャトブリアンに及ぼした影響は明らかではない。青年が社会の動静に無関心であったとは考えられないが、『回想』はただ冷静に事態を見守っていたと伝えている。<sup>(19)</sup>

一七八九年六月、すでに騒然としていたパリへ彼は再び赴いて、断続的ながら一七九一年一月まで滞在する。『回想』によれば、そこで革命の進行をつぶさに観察し、また様々な惨劇を目撃することになるが、述べられた感想が青年シャトブリアンのものであるか必ずしも保証はない。政治的反応を示すよりも、彼は内面形成に資する体験を積み重ねていったようにも見受けられる。つまり首都になお残っていた教養人との交際から忘れがたい印象と影響を受け、さらには彼の感情生活における彷徨を導いていくことになる神秘的かつ夢幻的存在「シルフィード」と出会うことにもなるのだった。青年の心は社会の変化と内面的幻影の間を揺れ動いていたといえるだろう。我々にとって重要なのは、このように革命が進行していたパリから、シャトブリアンがあえてアメリカへ渡る決意をした事実である。その時、故郷、家族、そしてフランスに対して彼はいかなる感情を

抱いていたのであろうか。そもそもどのような経緯からこの「探検行」を想起したのであろうか。

出発の意志は、一七八九年五月二八日付けの書簡において、初めて表明されている。

「予想せぬ用事のためにおそらく五、六年は我が祖国から離れることになろうかと思えます」<sup>(20)</sup>

しかしこの「用事」は直ちに喫緊のものとはならず、出発は漠然とした可能性としてとどまり続ける。この時代、新大陸行が重い経済負担を伴ったこと、シャトブリアン家の経済状況が逼迫していたことなどが計画の実行を遅らせた要因でもあったろう。やがて革命の進行は彼の書簡にも暗い影を落とすようになる。

「スイスにおられるあなたは平和と自然を満喫しておられましょう。ひきかえ、私たちフランスの住人はいまだ混沌の中に投げ込まれたままです」<sup>(21)</sup>

当時のシャトブリアンがアメリカに渡る決意を直接説明した文章は残っていないが、貴族にして海軍軍人であったパナに彼は次のようにうち明けたと伝えられる。青年はアメリカ大陸北部を横断する水路発見の計画を語った後、次のように記す。

「僕は未知の事柄を探しています。ここでは何もすることがありません。国王は破滅です。反革命は成就しないでしょう。一七世紀にヴァージニアに渡った清教徒たちのように、僕も行います。大森林へ向かいます。コブレンツに行くよりましでしょう。ただフランスから亡命したところで何になるのでしょうか。僕はこの世界から亡命するのです。その途上死ぬかもしれないけれども、出発しなかったより以上のもので戻ってくるかもしれません」<sup>(22)</sup>

フランスの政治状況に対する悲観的態度は明白であろう。興味深いのは国王の破滅と反革命の不可能を予感して、政治的献身を断念し、当時亡命貴族たちの一大集結地であったコブレンツに向かうことをも無意味と断じ



ている点である。そして時局とは無縁といふべきアメリカ探検の意義を強調するのである。したがって新大陸行が緩慢に現実化していった背景には、やはり混乱する社会からの脱出という要素が存在しているといわなければならぬだろう。このような逃避的ないしは現世離脱的態度が、やがて国王を支えるべく反革命軍に身を投じていく彼の行動と対蹠的であることはいうまでもない。<sup>(23)</sup>

なお『回想』の中では、彼を決断させたのはマルゼルブの影響であったと強調される。<sup>(24)</sup>一八世紀を代表するとさえいえる、この知識人・政治家は長兄ジャン・バチストにとっては義理の祖父にも当っており、<sup>(25)</sup>フランスワールネもその知遇を得たのであった。しかるにマルゼルブの広範な関心の一つに地理学があつて、青年に北方水路発見の必要性を説いたという。両者の緊密な関係は以下で引用するシャトブリアンの書簡によつても裏付けられるが、賢人の忠告が青年にとつて決定的であつたかどうかを解明することはできない。時局の緊張と帰還後の行動とを考えれば、マルゼルブによつて示された北部アメリカ探検の意義とは、青年が政治的混乱から離脱し現実社会から身を隔てたことに対する口実、客気に満ちた行動に対する権威付けと考えられるだろう。しかしながら青年を翻弄していた相反する感情と思考の一部、すなわち啓蒙主義的知への傾倒をこの年長者が代表していたことは疑いを入れない。<sup>(26)</sup>

つまり革命の深刻化によつて青年シャトブリアンは混乱した社会からの逃避として新大陸への出発を決意したと考えられる。そのような内心から発する脱出願望に立脚した上での、マルゼルブとの関係であり、また北方水路探検の決意であつたのだろう。しかも彼には自己の行動を合理化しなければならぬ必要があつた。なぜなら兄のジャン・バチストが正反対の行動をとつたからである。兄は反革命の旗幟を鮮明にしてパリに残り、そこで事態の推移を見守つたのである。<sup>(27)</sup>いいかえれば弟にとつても、主体的行動の選択肢は複数存在していた。

それゆえ彼には自己の選択を意義付け、さらには権威によって裏付けねばならなかったのである。

ただしシャトブリアンが彼方に対する積極的な憧憬を抱いていたことを忘れるべきではないだろう。新世界に渡ることは大西洋をのぞむ港町に生まれた青年の業でさえあった。さらには暗い情念が彼を駆り立ててもいた。<sup>(28)</sup> それらの感情にも突き動かされて彼は異国へと出発したのであった。少なくとも一七九一年においては、社会の動乱を目にし肌を感じていながら、社会変化に「参加」せず故郷あるいはフランスを離れていくことができたのである。故郷よりも未知の彼方がより強い誘引力を持っていた。あるいは外的社会の要請より内的欲求の方がはるかに強かったのである。彼がアメリカに出発したのは一七九一年一月のことであった。

新大陸行は様々な文章で、あるいは個人的体験として回想され、あるいは虚構の物語として語られることになる。三つの著作『革命試論』(以下原則として『試論』と略記<sup>(29)</sup>)、『アメリカ旅行記』、『回想』では直接言及されるばかりか、『アタラ』を初めとする一連の創作作品にも結実する。この体験に始めて触れた『試論』と最晩年まで推敲をやめなかった『回想』との時間的隔たりは、後者の校了時一八四六年をとれば実に四九年におよぶであろう。それらの文章はシャトブリアンには不可避の潤色と美化を伴って、語られる体験は変容を遂げていく。<sup>(30)</sup> 彼の旅行ないしは探検の実態がいかなるものであったかについては、『アタラ』刊行直後から記述の信憑性を疑う声が上がっていた。読者からの疑問あるいは要望に対応する形で、彼は自己のアメリカ体験を様々に補正し、また改変していったのである。

新大陸からマルゼルブに宛てた書簡には、冒険心に溢れた青年の野心が記されていた。

「まず森林を踏破して、それから北極圏アメリカのクリストファー・コロンブスになるつもりです。

(……) 僕は今、瀑布から五、六里にあるナイアガラの原住民のところ(31)にいます。」

彼は原住民の生活を目の当たりにして感銘を受ける。その際援用される『エミール』は青年の知的出自を明らかにするであろう。しかし原住民の社会に関して彼がもっとも熱を込めて説明するのがその家父長的社会構造であるとき、その思想的立場は、ルソーによる「未開人」の礼賛から、ヨーロッパの伝統的社会的擁護へと密かに移動し始めていたのかもしれない。残念なことに、この書簡以外、青年がアメリカで書き記した文章は残されていない<sup>(32)</sup>。

けれどもわれわれの観点からすれば、彼のアメリカ行の実態を探ることはさほど重要ではない。むしろこの体験によって彼の世界観がどのように変化したかに注目しなければならぬであろう。はたして青年にとってアメリカ体験はどのような意味を持ったのであろうか。回想的文章から後年のものとおぼしき自己顕示的要素を取り除いてみると、そこには意外なまでに凡庸な異国体験と散文的な感想が現れてくるように思われる。そもそも出発の願望はその実現によって充足されてしまい、また新世界体験が永遠の彼岸に達するようなものであろうはずもなかった。彼が当初アメリカ行に込めていた期待は、北方水路とミシシッピー川の水源の探査をして地理上の発見をすること、ルソーの影響が強い大自然の中に生活する「善良な未開人」と、政治的実験でもある新生共和国を實現することなどであった<sup>(33)</sup>。しかし徒手空拳、何の準備もなく出かけた青年が地理上の発見をなし得るはずもなく、直に北米探査の断念を余儀なくされる<sup>(34)</sup>。ナイアガラ瀑布に到達しえたのかについてさえも、すでに多くの論議がなされてきた。いずれにせよ、青年が夢想したまた公言していた壮大な旅程に比べれば、はるかに慎ましやかな範囲に甘んじなければならぬのである。また目の当たりにした「未開人」の生活は期待した醇朴さの中にもはや営まれてはおらず、「文明化」の波に洗われていた<sup>(35)</sup>。さらに新生共和国の現状も、一介のフランス人に接しうるところは限定されていて、『回想』が吹聴するワシントンとの会見に

至っては捏造といわざるをえないであろう。アメリカ合衆国社会には旧世界と何ら変わるところのない都市が建設されており、すでにイギリスと同様、功利主義に毒されてもいた。古代民主主義の再現を確認するつもりであった青年の期待はあえなく潰れたと、『回想』でさえ失望を隠さない。<sup>(36)</sup>

僅かに期待がかなえられたといえるのは、自然体験においてであろうか。『試論』には社会の桎梏から解放された個人による自由の体験として次のように述べられている。

「自由を愛していると自負する人は多いが、そのなんたるかを正しく理解している人はほとんどいない。インディアン部族を巡るカナダ探検の折り、私はヨーロッパ人居住地を離れて、大樹海のただ中に初めてたった一人になることができた。大自然がいれば私の足下から広がっていた。その時奇妙な変化が私の内奥で兆したのである。一種の譎妄状態が私をとらえ、もはや道をたどることもできなくなった。樹から樹へ、右往左往、闇雲に進みながらこう一人ごちていた。「ここにはたどるべき道もない。町もない。狭苦しい家もない。大統領も、共和国も、国王も、そうだ法律も、それに人類もない。人類か。いやいる。私を気にかけて、私とても気にかけることのないよき未開人たちが。彼らは、いまの私のように、思うがままに自由にさまよい、欲するときには食べ、望む時と場所で眠るのだ。」(……) 抗しがたい社会の抑圧から解放されて、私はこの時初めて自然の中の独立が持っている魅力を理解したが、それは文明化された人間が思い描きうる快楽をはるかに凌駕するものだった。なぜ未開人がヨーロッパ人たりえないか、なぜ多くのヨーロッパ人が未開人たりえたかを理解したのである。<sup>(37)</sup>」

それは自然と文明との決定的相違の認識であり、自然が牧歌的平穏とは異なるものであることの発見でもあったといえるだろう。この自然の魔力は『試論』の末尾で再び志向されて、文明社会からは遡行不可能なはるか

な存在として位置づけられることにもなる。巨大な自然の体験は青年を圧倒するが、その極限的性格のゆえに文明人たる彼の意識を逆に現実社会へと引き戻すことになったといえるだろう。あるいはこの感懐を、故郷を離れた青年が初めて味わう独立感ないしは孤独感と見なすこともできる。新大陸の偉観の中で昂揚が感得されたことによって、自然は新たな意味を獲得したのである。しかしアメリカ体験が結晶化し、シャトブリアンの世界観に明確な位置を占めるようになるためには、なおしばらく、これを反芻する時間が必要であった。

彼のアメリカ滞在があっけなく、わずか四カ月半で中断されるからである。『回想』によれば、一夜の宿を乞うた農家で足下に落ちていた新聞を暖炉の火を頼りに読んでフランス革命の進展を知ったのが、決断の理由であったとされる。

「それはルイ一六世の脱出と、この不運な君主がヴァレンヌで逮捕されたことについての記事であった。亡命の拡大と、フランス王族の旗のもとに士官たちが結集していることをも新聞は伝えていた。(……)

私は直ちに旅程を中断し、「フランスへ帰ろう」と考えた。<sup>(38)</sup>」

『アメリカ旅行記』ではこれに加えて、

「私には名誉が命ずる声が聞えたかに思えた。だから計画を放棄したのである。<sup>(39)</sup>」

とさえ記している。これらの記述にしたがえば、アメリカの森で帰国を決意したときに、彼は国王の側に立つことを選択したことになる。それならば、いかに状況に参加していくべきかという問題意識に応じて以後の行動が決定されていくことになるであろう。しかしながら貴族たちの亡命はバステューユ攻撃の翌日から開始されていたし、王権の動揺はシャトブリアンの出発以前からすでに露わになっていた。<sup>(40)</sup> 彼が目にした記事が伝えていたことは、事態の進展でありこそすれ、決して根本的変化ではなかったといえるだろう。そもそも青年

はフランスの状況を彼個人にも及ぶ危難として、切迫する脅威として捉えてはいなかった。ヨーロッパから出発した彼の意識は遠心的に、彼方へ、大陸深部へと向かっていた。当時の情報伝達速度やシャトブリアンのアメリカでの行動を考慮すれば、革命の進行を随時知りえなかったであろうことは推測できる。したがってフランスからの知らせによって受けた衝撃は想像し得ないことではない。フランスに帰還するや、旧世界が消滅しつつあることを目の当たりにして茫然とする様子は『回想』に詳細に記されてもいる<sup>(41)</sup>。けれども彼は故郷に戻ってから、主として経済的理由から婚姻の手はずを整えるのみならず、パリに赴いて様々な人士と交流を図っているのである。亡命に踏み切って反革命軍にはせ參じるまでには、アメリカ滞在よりも長い五カ月余の時間が経過するだろう。つまりアメリカ出発を促した状況を帳消しにして、緊急に帰国すべき理由は社会的次元には存在しなかったといわざるをえない。

彼の政治的転換がなされたのは、決して新大陸においてではない。ましてその世界観がアメリカ放浪中に根本的变化を遂げる余地はなかった。『回想』などによる劇的な説明は自己の行動を美化しようとする彼一流の脚色であるに違いない。上に述べたようなアメリカに対する失望、あるいは内面的な憂悶や不満に<sup>(42)</sup>、旅行資金の逼迫が重なった上で帰還を決定したと考えるのが妥当であろう<sup>(43)</sup>。そもそも出発の理由が自他共に明確でなければ、帰還の理由もまた明確たりえないのは当然ではないだろうか<sup>(44)</sup>。社会の変化の方向が見極め難く、それに対する自己の立場も十分に確立してはいなかった時期ではやむをえざることもあった。『アメリカ旅行記』に記された次のような述懐は率直にその点を指摘しているように思われる。

「アメリカ合衆国へ渡った頃、私は多くの幻影を抱いていた。私の人生が始まったと同時に、フランスの動乱もまた始まったのであった。私の中でも、我が国においても、何も完成されてはいなかった。<sup>(45)</sup>」

彼はいまだに自己の社会的、政治的帰属を確立してはいなかったといえるだろう。それゆえ帰国は亡命という再出発へと結びついていく。

『回想』は、フランスに帰還した青年が亡命へとはやる感情と、その感情に対する否定的判断とをあわせ持っていたことを説明している。この葛藤はまたしても賢者の下に青年を走らせる。

「私の熱情は私の信条を凌いでいた。亡命は愚行であり過ちであると感じていたからである。(……) 私は絶対君主制をほとんど評価していなかったから、自分の決心に対していかなる幻想も抱いてはいなかった。思いは屈して、名誉のために一身を捧げようと決意はしていたが、マルゼルブ氏の亡命に関する意見を聞いてみたいと思った。<sup>(46)</sup>」

アメリカからの帰国を決意したとされる経緯とはかなり趣を異にしているといえるだろう。そして再びマルゼルブの忠告が青年の進路を決定する。ただし年長者による状況の分析に影響されたのではないと回想者は記す。民衆による圧制を転覆し、正義を回復するためには、あらゆる手段を用いるべきだという言葉には、「感銘はさせられたが、納得したわけではない」からである。青年にとって政治的信条は行動原理とはなりえない。彼の行動が持っていた衝動性ないしは無思想性は、おそらく次の文が示すとおりであろう。

「自分の本能の命ずるまま私はアメリカから戻って、我が剣をルイ一六世に捧げようとしたのであって、党派的陰謀に与すつもりはなかった。<sup>(47)</sup>」

マルゼルブとの会話が強く青年に働きかけたのは「名誉」という点においてでしかなかった。

「名誉に関わる問題においては、私も年齢相応の衝動に抗しきれなかった。<sup>(48)</sup>」  
つまり国王に忠誠を誓った貴族が王族の下に結集している以上、貴族たるものはそこに参集すべきであり、し

からずんばその名誉にもとる、という論理である。名誉は亡命の大義でもあった。<sup>(49)</sup>そして名誉はシャトブリアンの行動を生涯にわたって律していく有力な規範の一つになるであろう。後年彼は次のように回想する。

「貴族であり文人である私は、名誉によってブルボン王朝支持者となり、理性によって王党派になり、嗜好によって共和主義者となった。<sup>(50)</sup>」

また『アメリカ旅行記』では、青年がすでにアメリカにおいて名誉に基づいて政治的行動をとることを決断したと説明されるのだった。この時間的操作が自己の行動を美化しようする意図によるものであることはくり返すまでもない。さりとて帰国後亡命を決断するに際して名誉の観念が決定的であったとする『回想』の説明にも、どれほどの信憑性があるかは明らかではない。亡命先のロンドンでやがて記されることになる『試論』と対照すれば、むしろ否定的な印象を持たざるをえないだろう。しかし政治的色彩の濃い『回想』が上のようにむしろ非政治的解説を加えていることから推論できるのは、亡命決断の理由が政治思想上の選択ではなく、具体的暴力の脅威でもなければ、経済的窮迫でもなく（亡命資金はかろうじて調達されていた）、個人的行動規範の実践であったということであろう。その価値観を「国王への忠誠」ではなく「名誉」と表現するとき、ある種の自己中心性が現れては来ないであろうか。それを要請したのは、内面に滾って、絶えず彼を行動へ駆り立てていた「熱情」であったのであろうか。

そもそも「名誉」とはシャトブリアンにとって何を意味したのであろうか。貧しい地方貴族にとって、家系とその歴史に対する矜持以外に自己を支えるものは存在しえなかった。しかし、如上のように認識されていた家系が価値を持ったためには国王の存在を不可欠とする。フランス王家に対する先祖の献身こそが、シャトブリアン一族の貴族たる由縁を保証しているからである。家紋の中心におかれた「黄金の百合」は国王聖ルイから



下賜されたものであって、そこに添えられた銘言「我が血はフランスの旗を染めた」は一族の行動を強く規制していたに違いない。<sup>(51)</sup>このような意識とフロンド的精神は一見矛盾しているように感じられるが、フランソワ・ルネの父親が宮廷に抱いた怨恨が、一族の献身が十分に報われず裏切られたとする、いわば愛憎相半ばする感情であったを思えば、二つの感情は盾の両面であったとも考えられる。亡命の大義である名誉の観念は必然的に青年の屈折した帰属意識、その葛藤を喚起することになる。

したがって亡命を巡る名誉の観念とシャトブリアンの関わりはむしろ漸進的深化として考えた方がよいであろう。混乱する社会に身を投じる以上、青年と社会を結びつけさらにはその行動を合理化する何らかの論理が必要とされた。マルゼルブの忠告があったにせよ、青年が自己の行動を名誉の観念のみに還元することには困難がある。しかるに亡命の決意と実行は彼の境遇を不可避的に変化させ、以後否応なく一定の社会的行動を實踐し続けていくことを要請する。<sup>(52)</sup>けれども革命に対する評価を定め、政治的信条を明らかにし、そこからとるべき行動の方向性を導き出すことができないのであれば、自己の行動を合理化しうるのは個人的倫理規範以外にはない。亡命者たちが奉じる名誉とは、青年にとって、政治性を直接帯びることなく社会に対する自己の行動を制御しうる価値観でありえた。つまり反革命思想を信ずることができない青年が亡命を選び取った時から、自己の社会的行動を支持しうる可能性をもつものは、名誉しか存在しなかったのである。彼の「熱情」、あるいは『精髓』で用いられることになる表現を先取りすれば「情念の曖昧さ」はこうしてそれを燃焼させる方途を定めていったといえようか。ただし名誉は直接的な政治性を持たぬとはいえ、個人の存在を伝統的価値観の中に位置づけるものに違いなく、啓蒙主義的価値観とは齟齬をきたすことになる。さらに、反革命軍に参加する以上は反宮廷意識は抑制されたともいえようが、青年の地方意識が超克されて確固たる政治的信念が生まれ

たわけでもない。新大陸への出発から、帰国、亡命と続く混迷そのものであるかのような一連の行動は、巨視的に見て、彼の自己形成過程と考えることができるだろう。すなわち亡命は、祖国からの流離、自己同一性の喪失を意味するのではなく、むしろ反革命に参加することによって自己の同一性を獲得しようとする手続きであったのだ。この時点で「亡命」という行為を実践しえたこと、その限りにおいて青年は自己の行動の方向性を見出しえたのであり、それは時を経て名誉という大義に収斂していったのである。<sup>(53)</sup>

一七九二年七月一五日、シャトブリアンはパリからブリュッセルに向けて出発し、亡命行を開始する。当初ほとんど牧歌的であった雰囲気は、戦闘に参加するにおよんで一転する。彼は負傷してロンドンにまで逃げ延びると、文字通りの困窮と悲惨を体験し、イギリス流謫は七年間の長きにおよぶ。『回想』には亡命者の生活が縷々記されている。ただしそこにも様々な脚色があることを指摘しておかなければならないだろう。<sup>(54)</sup>

亡命中シャトブリアンがフランスにどのように位置づけ、自己の帰属をどのように考えていたかは、この時期に執筆された『革命試論』<sup>(55)</sup>を検討するにしくはない。著作は一七九三年夏に執筆が開始され、九七年春、予定された三巻のうち二巻が出版された。当初の意図は、古代以来の様々な革命（古代に七つ、近代に五つ）を比較し、さらには思想の変遷をたどって、フランス革命との異同を探り、もってフランス革命の意味と射程を明らかにしようとする遠大なものであったが、ギリシャ時代の革命を近代の革命と比較検討した部分のみが刊行されたのであった。著作の要約は不可能であろう。論理は安易に流れ、<sup>(56)</sup> 叙述は未整理である。作者自身が初版「前言」に記してさえいるように、歴史の不可逆性、古代と近代における社会構造の根本的相違などに関する的方法論的曖昧さや、作者自身の思想的立場が定まらないことなどから、全体を通じて雑然とした叙述が展開されることになる。しかし文中に頻出する「私」の存在は、すでに隠れもないシャトブリアンの著作である

ことを物語っている。「私」は論述の主体のみならず、アメリカ行などの個人的体験の主体をも含んで、著作はしばしば私的雑記の様相を呈してしまう。「前言」には次のように記されている。

「文中に「私」がしばしば現れるのは、この作品がまず「私」のために、「私」一人のために書かれたからである。ほとんどすべての箇所に、自己と対話する不幸な男の姿が認められるであろう。その精神はある問題からある問題へ、ある記憶からまたある記憶へと彷徨っていく。彼には書物をもつす意図はなく、その精神活動を丹念に日記につけ、その感情と思考を記録しておこうというだけなのである。<sup>(57)</sup>」

したがって煩瑣な知識、古代と現代の頻繁な交錯、過剰なまでの口吻が混淆する、ほとんど人格的次元での混乱に読者は立ち会うことになる。シャトブリアンは一七九七年の時点で、時代状況を理解しようと努めながらも、断片的な思索を寄せ集めることしかできなかったといえるであろう。それは「時代の児」であった彼の限界でもあった。<sup>(58)</sup>

特にフランス革命については、その政治理論をある程度評価して建設的側面を認める。

「革命にはいつも何かしら好ましいものがある。<sup>(59)</sup>」

しかしその実践過程に対しては失望と敵意を隠さない。

「共和主義に対する熱狂の炎によって精神薄弱になったこれらの人々は、肅清のための投票によって、犯罪そのもの*に*いわば追い込まれてしまい、未曾有の勢力を得て、未来永劫超えられることがない大罪の数々を繰り広げたのだ<sup>(60)</sup>。」

『試論』における作者は民主主義の原則に対する賛意と革命の現実への幻滅によって引き裂かれているように観察される。啓蒙思想やキリスト教に対しても、それぞれ賛意と批判が交錯する<sup>(61)</sup>。しかるにこの葛藤は作者の

内奥から発する不安、「何ものかに対する漠然とした渴望」に由来していると説明される。<sup>(62)</sup> その「渴望」が

「アメリカ大陸の人外境へと、ヨーロッパ大陸の諸都市へと私を駆り立てた。そしてその渴望をいやすために、カナダの大森林奥深くに分け入り、またヨーロッパの庭園や寺院に溢れる群衆の中に紛れ込んでいったのである。(……) 人間よ、訳の分からぬ願望にむしばまれた心を抱いて、かしこを彷徨うのがおまえの定めなのか。」<sup>(63)</sup>

アメリカ行と亡命行の根底には共通の衝動が働いていたことがシャトブリアン自身によって認定されるのである。つまり、彼はいまだに自己同一性を確立しようとする途上にあった。

政治的次元における論旨の混乱はさておくとして、我々にとって興味深いのは、『試論』において様々な革命が考察されるうちに、革命によって惹起される政体の断絶を超越した共同体の存在が自ずから浮かび上がってくることである。また政治の現象を生々流転の原則に還元するとき、そこから政治のダイナミズムいかにすれば内的論理が捨象されて、奇妙に非政治的な定数が分明になってくる。<sup>(64)</sup> つまり、作者によれば革命によって社会の様態が一変したとしても、連続する共同体に対する人々の帰属は変化することがない。人々と共同体とのこの紐帯は歴史を貫き、またその変化を様々に促す基本的原理ではないだろうか。そして彼らが帰属し続けるこの共同体こそは、「祖国」と呼ばれるものの実体ではないだろうか。しかしながら革命の展開次第では、一部の人間にとって、その関係を断絶させられる暴力的状況、すなわち亡命が出来る。歴史の中でくり返される革命や政変に、犠牲としての亡命者が存在したことを作者は指摘する。たとえば古代アテネではヒッピアスの暴政がそれである。

「死によって追い立てられ市民たちは破滅を運命づけられた祖国から、群をなして、急いで逃れていく

のであった。<sup>(65)</sup>」

このような史実がフランスの現状に結びつかないはずがない。

革命から生じる亡命者の痛苦は個々の事象について言及された後、「亡命者について」という一章で集中的に検討される。それによれば、亡命者とは、

「迫害によって国を離れることを強いられ、祖国に旧来存在した秩序のために武器を取った<sup>(66)</sup>」

人々と定義される。本来断ち切りがたい祖国との絆を断たれ、さらに祖国に対して弓を引くことについては、危機的な状況、切迫する危難がその行為を正当化すると説明する。作者は古今の比較によって論議を進めようとするが、やがて章全体が自己表白と化していく。不幸を論じることができるのは不幸な人間だけであると断定して、革命が惹起した悲惨と国を逃れなければならなかった苦衷をこもごも強調する。また祖国を離れてはならないという建前は、現実の危難を考慮すれば、皮相であると斥ける。亡命とはいわば緊急避難であり、絶望から生じるやむをえざる行為なのである。

しかし、シャトブリアン本人について考えれば、彼の亡命が暴力にさらされた挙げ句の避難であったわけではなく、むしろ自由意志によって選択されたものであることはすでに見たとおりである。ブルターニュにも騒乱が波及していたとはいえ、革命勢力によって肉親に危害が加えられるのは『試論』執筆時期より後のことである。つまり、『回想』がやがて強調することになる「名誉のための亡命」という論理は『試論』では採用されない。自己の葛藤がはらむ内面的要素と社会的要素の二面性を青年が十分に整理することができなかったためであろう。あるいは革命のなんたるかを政治的次元で把握できなかったからかもしれない。『試論』の作者は自身を何より「切迫する危難を脱した亡命者」として規定する<sup>(67)</sup>。したがって「亡命者」にとっては祖国からの

流離こそが問題になる。

「どこに行くべきか、どこに逃げるべきか、どこに身を隠すべきか。悲惨の淵に沈み、祖国愛は溢れたまま、遠国への道をたどることになる。(……) 絶望が彼らをとらえ、そして彼らは出発したのである。」<sup>(68)</sup> 作者自身にとって祖国とはどこに存在していたのであろうか。「前言」は冒頭で次のように記していた。

「フランスを離れたとき、私はまだ若かった。四年間の不幸によって私は老いた。」<sup>(69)</sup>

まず遠心的な方向性を持っていたアメリカ行とは正反対のベクトルが彼の意識に作用していることが明白となる。さらに、離れることを強いられたのが、サン・マロでなく、コンブールでなく、フランスであると断ずるとき、そこに現れる変化は明らかであろう。かつて「冒険者」たらんとした青年が出発したのは故郷に違いなかった。今や彼は故郷ブルターニュではなく、祖国フランスを離れたと揚言するのである。四年の歲月によって彼は失ったものを新たな視野の中に位置づけたのであろうか。革命の展開によって彼は自己を取り巻いていた社会の枠組みを、地方ならぬ国として認識したのであろうか。彼が考察を続ける革命とは国家の次元で出来る変事には違いない。あるいは他民族、異文化の国に生活して、自己が他ならぬフランス人であると思いつたためであろうか。彼の関心は祖国の将来に注がれるようになる。

「歴史的条件を検証すれば、フランスの未来について私は慄然とせざるを得ないのである。」<sup>(70)</sup> 亡命者とは祖国を発見するものの謂いであるのか。シャトブリアンが祖国との紐帯を発見したのは亡命時代のことなのである。

この変化は単に個人的感情のみに関わるものではない。作者の視線は、古今の亡命理由に関する政治的考察から、亡命者の祖国愛へと移動していく。

「人は地上を彷徨った後、抑えがたい本能によって、自分が生まれた土地に戻って死にたいと願うものである。」<sup>(71)</sup>

この時点で彼にとって信じうるものは、政治的信条より祖国愛であったのだ。

しかし自己の祖国像がどのような政治的思想的経緯の下にあるのか、明確な認識はされていないというべきであろう。彼は革命勢力によって示される祖国観をも評価する。たしかに祖国が共同体の連続性として位置づけられるならば、それは党派的对立や政治的断絶を超えて存在することになる。古代ギリシャとフランスの革命期を比較し、それぞれペルシャとオーストリアによって独立が脅かされていたことを示した後、作者は次のように記している。

「自由を愛好する人々は、危機的な状況によって発奮、祖国の不幸に比例して勇気が増大していくのであった。何かしら崇高なものが彼らを苦悩させたのである。」<sup>(72)</sup>

革命を支持する理念にも共感を禁じ得ないのであれば、祖国の観念を非政治的なレヴェルにとどめざるをえない。『試論』は政治論として構想されながらも、作者の混乱と逡巡によってしばしば政治的判断が後退し、情緒的口吻が露わになる。<sup>(73)</sup>

なお『試論』はマルゼルブの行動についても評している。亡命を緊急避難であると断定した後では、生命の危険を省みず国王の弁護に当たって、処刑された者の勇気を讃えるのは当然であろう。

「ルイ一六世の臣下のうち、パリに残ったのはただ一人だった。」<sup>(74)</sup>

残留者と亡命者の対比。残留した者がただ一人であったとは文飾に違いなく、この残留者を神々しいまでの存在として称賛するのは、筆者自身の境遇を顧みてか、浮薄な亡命貴族に対する反感の再燃であろうか。ひきか

え、亡命者には死にきれなかったものの無惨を割り当てる。

「私より幸福な者たちは、その血をあなたの血に混ぜることができました。あなたが亡くなった後もこの地上で、何の幻想も抱かず後悔に満ちて、生きながらえていくのが私の運命なのでした。」<sup>(75)</sup>

つまり亡命者の政治的責務は説明されない。亡命は個人の運命と徳義の問題に還元されてしまうのである。

同様に革命における国王の位置づけもまた政治性を免れる。ブルボン王朝の悲運については同情を示すものの、作者はその境遇を「人間に共通の運命」<sup>(76)</sup>といいきって、むしろその運命を甘受すべきことを説く。国王についてもその人格の高潔や寛容を説いて、政治的手腕や政策の是非は論じられない。<sup>(77)</sup>したがって王朝の滅亡

を再興すべき必要や、その運動に参加する政治的意志といったものもまた示されない。続く章では「不幸な人々へ」<sup>(78)</sup>と題して、問題を人類一般の不幸へと敷衍する。(なお全集版注記では全体の論旨にそぐわないものとしてこの章が激しく批判されることになるのは、シャトブリアンの変容を示すものとして注目に値するだろう。)政治的変化が普遍的災禍の一つとしてとらえられるのである。また不幸の極みは何かとの問いにはパンの欠乏であると答えて、倫理的危難よりも、身体的苦痛が強調される。これは亡命者が現実には味わっていたに違いない物質的窮乏、生存の不安が反映されたものであるうか。そしてこのような人間社会に不可避の悲惨から免れる場として「自然」をあげて、非政治的あるいは脱政治的意志を明白にする。

「自然との生活は心地よいものである。私は孤独の中に救いを求めて、世間の海には二度と船出するこ  
となく、孤独の中に死んでいこうと決心したことがある。(……)幸いなるかな、自然を愛する者たち  
よ。逆境の日にも自然を、自然だけは見出すことができるであろうから。」<sup>(79)</sup>

さらに、いわば隠棲の術として、植物学や読書(リチャードソン、ルソー)などの精神的効用も説明される。



一見、小市民的幸福の称揚にも思われるこれらの記述は、身辺の平安を奪われてしまった亡命者の悲痛な願望なのであろうか。自然志向は終章でもくり返されて、アメリカ体験が美しく描写される。生々流転の現実を認めて、革命の不可避性とその効用をも指摘した上で、なおその認識に飽きたらぬ著者の立場を示すものといえるだろう。『試論』中断の原因は、政治的判断を留保しながら、政治現象について論じようとしたことにあったに違いない。

\* \* \*

シャトブリアンの思考は後年の『回想』が提示するように整然とした発展を遂げたのではなく、ある種の往反、振幅を密やかにくり返しながら、次第に形成されていった。終結することがない亡命生活は、青年の心から客気に満ちた昂揚を消し去っていく。

革命に対する否定的評価は一七九七年七月一〇日頃と推定される書簡に、現存する彼の文章の中では最も早く、かつ明確に表される。同年五月に刊行された『試論』への批判に対して彼は次のように反駁する。

「氏と同じように私も無神論の人々は極悪人たりうると考えております。一言でいえば、革命が非道な方法でなされたことを、私以上に深く確信している者はいないので。拙著の巻頭から巻末に至るまで私はそのことをくり返したのではなかったでしょうか。<sup>(80)</sup>」

もとより革命に対して両義的评价を示していた著作の論旨は変わりようがなく、この自己弁護を額面通りに受け取るならば、刊行後に作者の論点が移動をしたというべきであろう。つまり革命の目的よりもその過程をよ

り重視するようになったのである。変化の背後には、出口のない状況に対する無力感が存在しているに違いない。

「今、私は祖国なきユダヤ人のようです。」<sup>(81)</sup>

一七九八年六月末、革命派によって投獄された母親が釈放後死亡したとの知らせを受けてシャトブリアンはカトリックへ回心したと説明する。「私は泣いた。そして信じた。」との一節はあまりにも有名であろう。<sup>(82)</sup> 事実関係について、この劇的な説明に少しく検討を加えれば、例によって不審な点が表出する。<sup>(83)</sup> 彼の精神のおよび政治的变化は、上に挙げた書簡等に示されるように、亡命生活を通じて徐々に進行していったものであろう。しかし、この詳細はさておくとして、この時期に出来た「回心」によって新たな著作の執筆が促されたことは疑いを入れない。様々な書簡には著作刊行を商業的に成功させたいとする意志が示されてもいる。当時の作者にとっては出版が貧窮を脱する方途としての意味を持ってもいた。亡命者の立場を踏まえれば、フランス当局を刺激しては利益にならぬという配慮もまた働いていた。

「販売を妨げるような政治的言辞は一つも著作には含まれてはいません。著作は完全に文学的です。」<sup>(84)</sup> シャトブリアンはこの時期に、創作と護教論の二つを書き進めていたと推定される。

やがて一八〇〇年五月には変名で隠密裡にフランス帰国を果たすが、『回想』は次のように記している。

「我が人生の第一期が終わり、「作家としての経歴」が開かれることになる。私は私人から、公人へとなるのである。」<sup>(85)</sup>

この転換は単に身边の変化のみではなく、彼の言説が社会化していくことを意味するものでもあった。同年二月『メルキュール』誌に掲載された「フォンタヌ氏への手紙」には『キリスト教精髓』の著者」という名

義で、スタール夫人批判を展開し、キリスト教擁護と反哲学的立場を鮮明にする<sup>(86)</sup>。それはすでに対社会的マニフェストに他ならず、政治的意味を持たないわけには行かないであろう。

一八〇一年四月『アタラ』刊行は大成功を収め<sup>(87)</sup>、それによってシャトブリアンは作家として社会的に認知される。この作品はやがて『キリスト教精髓』(以下原則として『精髓』と略記)初版の中に組み込まれる。しかし一八〇五年に『ルネ』と共に合本となって独立した形で出版されると、その後両作品は『精髓』と切り離されて、アメリカを舞台とした連作として提示されるようになるのだった。そもそも両作品は叙事詩的作品『ナチエーズ族』の中に構想されていた。『ナチエーズ族』が物語世界全体の枠組みを示し、『アタラ』と『ルネ』は、それぞれインディアン長老シャクタス若かりし頃の体験と、ルネが新大陸を放浪するに至った経緯を説明する挿話だったのである。それゆえ『アタラ』も『ルネ』も登場人物の境遇については舌足らずな説明しか加えていないのであった。作品群全体を包摂する『ナチエーズ族』は、アメリカ滞在時に手を染めた草稿を下にして、『革命試論』刊行後、『精髓』と平行して執筆が進められたのであろう。ロンドン亡命中、一八九九年には作品として完成したと推定される<sup>(88)</sup>。ただしその出版が実現しなかったことから、『アタラ』が分離されて刊行され、やがて『ルネ』と共に『精髓』に収録されたのである。『ナチエーズ族』が公になるのは一八二六年の個人全集刊行を待たなければならなかった。このような経緯によって刊行時期は一致しないが、三作品はいずれもロンドン亡命末期から『精髓』刊行までの作者の考えをよく反映するものとして観察を進めることにする。

アメリカを舞台にしたこれらの作品は祖国の存在を重層的に照射し、その普遍性を明示する。すなわちどの作品もそれぞれの主人公の流謫が中心的主題をなし、作者の祖国観を小説空間の中に明瞭に表す。

『アタラ』は、フランスを離れ新大陸へと旅だったルネや語り手を登場させるだけでなく、インディアンにとっての祖国ないしは故郷の喪失を描いている。

「異国の祭りの煙など目にもせず、祖先の宴にしか連なったことがない人はなんと幸せなことだろう。」<sup>(89)</sup>  
インディアンの娘アタラによって繰り返されるこの言葉は、運命によって裏切られることで一層切実なものになる。彼女は囚われたシャクタスと行動を共にして、故郷を捨てることを余儀なくされる。シャクタスは恩人に報いることなく、恋人をも失って、遙かヨーロッパにまで彷徨うことになるであろう。ナチューズ族はフランスとの戦闘に敗れて、逃れていった土地からもイギリス人によって追われ、

「私たちは故郷を追放されました。ですから新しい国を探しに行くのです。」<sup>(90)</sup>  
まさに人間は、

「祖先と子孫、思い出と希望、滅びた祖国と来るべき祖国の間を、歩んでいくのだった。生まれ育った土地を捨てるとき、自分の育った家や、もはや人の住まぬ祖国の原を横切って悲しげに流れ続ける部落の河を、逃れ行く丘の上から今生の別れと目にするとき、どれほどの涙を流すのであろう。」<sup>(91)</sup>

『アタラ』とはインディアンの側から描かれた祖国喪失の物語なのである。それはフランス人ルネが流れて行った最果ての地アメリカを舞台にすることによって、主題の普遍性と、悲劇の深刻さを一層明らかにする。

すなわち『ルネ』もまた祖国を失った主人公の物語であった。姉に対する近親相姦的思慕を断ち切るべく、世界をめぐったルネの自己流謫は、自己を祖国から隔てる距離によって測られるものであった。

「私は生まれ故郷の陸地が永久に遠ざかっていくのを目にしました。祖国の木々が風に揺れている様子を、そして修道院の屋根が水平線に沈んでいくのをいつまでもじっと眺めておりました。」<sup>(92)</sup>

『ルネ』における祖国とは彷徨する主人公によって外部から位置づけられ、いくつもの意味を提示する。たとえば異国での流浪を重ねながら、哀惜の情とともに回想される祖国は、地理的な差異のもとに示される。異国情緒あふれる新大陸の自然や風物は、主人公が後にしてきた故郷の風土との対比を鮮明にするであろう。祖国はまた時間的な距離によっても隔てられるもので、回想される祖国は過ぎ去った幼年期と結びついていた。それは無垢と至福の空間であって、姉に対して禁じられた思いを抱いたことによって永久に失われたものであった。この時間的な距離は、単に個人的な経験として倫理的に反省されるだけではなく、社会的、政治的な文脈にも関わっていた。つまり遠方へと自己を強いた旅から一旦フランスに戻った主人公の目に映じた祖国とは、かつての栄光を失い、汚辱に満ちていた。社会の不可逆的な変質は、黄金時代の喪失を明確に認識させる。この変化はルイ一四世の死によって始まる摂政時代のことと説明されるが、大革命後の時代が作者の念頭にあっただであろうことは想像に難くない。<sup>(93)</sup> 個人的な記憶に結びついた故郷は、社会的次元で捉えられた祖国へと連続していく。『ルネ』には狭い地域に限定された故郷に並んで、個人が帰属する国家としての祖国が併存しているといえよう。しばしば主人公の「内的」憂悶や自意識の「ロマン主義的」屈折といった類型的なイメージに還元されがちなこの作品が、すでに個の位相では捉えきれない祖国概念を示しているのである。ただしそれは文明的な枠組みに位置しており、政治的な要素はむしろ不分明なままであるというべきであろう。

『ナチューズ族』においては、祖国喪失の主題が叙事詩的な広がりの中に展開される。『アタラ』の中ではフランスへ渡ったとだけ触れられていたシャクタスの体験が、この作品によって詳述される。若きインディアンの望郷の念は次のようであった。

「ある宵のこと、私は海辺をさまよっておりました。波の広がりを見やりながら、彼方に我が祖国の岸

辺が見いだされはしまいかと目を凝らすのでした。この波はアメリカの岸边を洗ってきたのだと思いましたが。苦悩のうちに思い浮かべる幻影の中で、故郷の森の木々のように、海が悲嘆の声をあげているかに思えました。<sup>(94)</sup>」

もとよりルネとシャクタスでは大西洋を渡った経緯が異なり、地理空間では対蹠的な方向を示しているが、各々が故郷を思いやるのである。インディアンの郷土も、フランスによる攻撃を受け危機に瀕しているという点において、もはや単なる情緒的回想の対象ではなくなり、フランスと等価な「国」としての空間を形成する。その結果、主としてミシシッピー河口地方で展開される物語でも、「祖国」、「国」、「流離」などの語彙が頻出することになる。つまり新旧世界は、自然対文明の図式によってではなく、二つの異なる文明の対立として提示される。たとえばシャクタスはパリやヴェルサイユを訪れて印象を語り、その一節はさながら『ペルシャ人の手紙』を彷彿とさせる。しかしフランスの反映の裏に隠された悲惨を正確に観察したにしても、彼がヨーロッパ文明を敬してためらわぬのは、作品がそもそも『精髓』と並行して執筆されていたことに由来するのだから。シャクタスはアタラの死を目の当たりにしてキリスト教に帰依することを誓っていた。<sup>(95)</sup> 作者はインディアンとヨーロッパを対置させて、文明の優位を強調するのではなく、また文明の悪をのみ糾弾して未開人を礼賛するでもない。つまりシャトブリアンは明らかにルソーの影響下に出発しながら、それとは異なる立場を確立したといえるだろう。それは大自然の中に生きる善良な未開人という啓蒙主義的概念が、新大陸においても存在しえない現実の確認であった。彼は文明の弊害を指摘しつつも、その基本的な効用、善性を肯定する。この折衷的位置は彼の思考により困難な課題を提示するものともなる。

「私はルソー氏のような未開人の心酔者ではない。(……) 思考こそが人間を人間たらしめると信じて

いる。<sup>(96)</sup>」

つまりキリスト教によって醇化された旧世界の中心性は揺るがぬものの、具体的な祖国を大西洋の両岸から双方向に描くことによって、普遍的な価値としての祖国を明らかにするのである。

シャクタスのフランス体験とはまた、若きルネが知りえなかった往年の栄光、失われた時代の光輝を説明する機能を果たしてもいる。彼の体験によって物語は歴史的位相に置かれ、個人の体験を語って暗示的調子に終始する『ルネ』に対比すると、明白な社会性をもつ。ただいずれにとってもよき時代は、不可逆的に、過ぎ去り消滅してしまった。その悲劇的認識は作品群を貫通する。

「私が見聞した世界は過ぎ去ってしまった。私の存在とは、倒れ果てた古い森に、時がうち倒すのを忘れて残された最後の木のようなものだ。<sup>(97)</sup>」

シャクタスの流謫はルネのそれと並置されることで、時代および出自を超えて、普遍の意味を持つ。

フランスを離れ新大陸に渡ったルネとでも、帰属を明示することを要請され続ける。インディアンの中では常に白人として見なされ数々の中傷、陰謀の対象となろうし、白人からは反逆者として裁かれ、不穏分子として、植民地からの追放、つまりフランスへの送還が判決されるだろう。<sup>(98)</sup>かくしてルネは両世界から追放される。

「私にはこの地上に祖国もなく、両親もないのです。この森林の中でも異邦人にすぎず、私の生死は誰の関心も惹かないでしょう。<sup>(99)</sup>」

彼にはもはや行き場がなく、帰る場所もない。その流謫は生の本質に関わるものであることを示している。

「ヨーロッパでもアメリカでも、社会に対しても自然に対しても私の心は倦み疲れてしまいました。(……)生まれて来なければ、あるいは未来永劫忘れ去られてしまえばよかったものを。<sup>(100)</sup>」

彼は常に世界から排斥される運命にあったのである。

作品は縦系にルネの運命を、横系にはフランスから追放の憂き目にあった新教徒、厳寒の地において幸福を享受するエスキモー、アフリカの大地から売り払われた黒人奴隷、さらにナチューズ族自身が故郷を追われる様を描いていく。「祖国」と「流謫」が主旋律となって様々に変奏され、展開されるといえようか。登場人物たちの祖国喪失、異郷への追放はいくつかの感情を浮かび上がらせる。第一に、ルネやシャクタスの体験が示すように、個々の生における幼年と老年の対照、帰らざる時への郷愁であり、第二には、普遍的な次元で、時の経過に対する無力感であろう。第三には、社会的次元で捉えられて、過ぎ去った時代への哀惜となり、第四には、具体的に、かつて存在した社会への執着、第五にはその社会が体現していた価値体系への殉教者的献身の決意であろう。かくして『ナチューズ族』は、ルネをその代表として語り手を含めたほぼすべての登場人物がそれぞれに祖国を捨てざるをえなかった事情を対比させ、異郷にさまよう人々を描いて、彼らの悲劇を謳い上げるのである。前半と後半では自然に対する態度が微妙に異なるが、作者の喪失感を反映するものであろうことは想像に難くない<sup>(10)</sup>。

このように三作品に観察されるシャトブリアンの祖国観は、生まれ育った地方への愛着を超えて、国家的規模、さらには文明論的拡がりの中へと展開する。それは彼自身の帰属意識の変化でもあろう。両世界の間を置くことによって、いわば合わせ鏡のように、彼は自己の存在様態を認識していったのである。つまりアメリカ行自体からは世界観の変化が生じなかったものの、それに続く亡命体験という故郷からの流離によって彼はまず言葉の真の意味での「異郷」に接し、その体験を通じ、時を経ることで自己の「祖国」を発見し、さらにその認識を反映させる形で「異国」としてのアメリカ像を反芻し、確立したのである。いいかえれば、創作



に見られるアメリカ像はシャトブリアンがイギリスにおいて味わっていた喪失感を反映するものであり、登場人物たちがこもこも語る望郷の念は亡命時代の作者の心境を再現するものであった。彼はアメリカならぬイギリスで祖国喪失の悲哀を体験し、それによって彼の意識は祖国に、いわば回帰したのである。その時、彼の祖国概念は、政治的な文脈で隣接する国家との具体的対立関係によって把握されるというよりも、まずは個人の文学的想像力を構成する要素として位置づけられたのである。<sup>(102)</sup>

『アタラ』刊行を果たした後も、シャトブリアン個人の境遇はなおきわめて不安定であった。一八〇一年四月には警察長官フーシェ<sup>(103)</sup>に、五月には第一執政ボナパルト<sup>(104)</sup>に亡命者名簿からその名前を抹消することの請願書を送っている。著作刊行に際しても無用の軋轢を避けようと、政治的にきわめて神経質であった。したがってその間に展開された著述活動は、状況判断に資する観測気球としての意味を持ったのであろう。『アタラ』初版序文の中で、「『キリスト教精髓』の中で革命というものは論議されていないことを断っておかなければならない。」<sup>(105)</sup>と、前著の『試論』と比較して、近く発行される予定の新著の特徴を、つまりは非政治的意図を強調する。しかしこのような配慮こそは、言説が政治によって必然的に絡みとられていくことの認識を示し、また作者が密かに抱いていた「参加の意志」の発現であったともいえるだろう。

『キリスト教精髓』<sup>(106)</sup>は一八〇二年四月一二日に刊行される。この審美的護教論は四部構成で、第一部では教義と理論、第二部キリスト教詩学、第三部キリスト教と美術および文学との関連、第四部礼拝および儀式をそれぞれ論じて、啓蒙主義の影響下にあった懷疑からカトリシスムへの回帰を明確に説明している。

この著作出版に関しては当時の政治状況との密接な関係を指摘しなければならない。作者はコンコルダ批准を待って、その四日後に刊行したのである。政治のために宗教を必要としていたナポレオンは『精髓』の意味

と効果を十分理解したのでもあるから、シャトブリアンが政治と宗教の仲介者としての役割を果たすのだと自負したとしてもあながち不遜なこととはいえないであろう。<sup>(108)</sup> 旧体制下では哲学が社会改革理論ないしは統合理論としての役割を果たしていたのに対し、革命以後は詩学、感受性などがそれらに取って代わっていくのだった。つまり宗教への回帰傾向が、裏返せば反哲学的ないしは反啓蒙主義的傾向が社会全体に顕著になって、新しい政治性を形成していったことが背景に存在していた。この意味においてシャトブリアンの著作は時代潮流に合致していたのである。時局に乗じて、書物刊行は成功を収める。<sup>(109)</sup> 『精髓』には、狭隘なる社会理論である政治哲学に代わってキリスト教を重視すべきことがまさに説明されていたからである。<sup>(110)</sup> 既に『アタラ』を出版して、社会現象になるまでの反響を得ていたシャトブリアンは的確に時代を把握していたといってよいだろう。それは彼自身の感受性が共感を持って社会に受け入れられることを保証するものであった。<sup>(111)</sup>

さて『精髓』第一部第五卷「自然の不思議によって立証せられる神の存在について」の中で、「祖国の本能」と題した章は次のように祖国愛を規定する。

「人間に与えられた最も美しく、最も道徳的な本能こそ祖国愛である。<sup>(112)</sup>」

この感情は第一義的には郷土愛というべき、生まれ育った土地に対する愛着の情であって、帰属する国家に対するものとは必ずしも一致しないと考えるべきであろう。それは「祖国 *patrie*」という語の意味の重層性とその変遷にも絡み、この語が広く国の次元で用いられるようになるためには、フランス革命によって国民国家ないしは民族国家が成立することを必要とした。封建関係に基礎をおいていた国家が、階級の上下を問わず、人々の帰属意識の対象として認識されるはずもなかった。フランス革命期という国家の変成過程を生きたシャトブリアンにとって、祖国とは変貌しつつある概念であった。この時代における「祖国」と「故郷」の概念は、常

に、曖昧で流動的な様相を呈している。さらに彼の個人的な事情、ブルターニュの出身、貴族の血統、近親者を恐怖政治で失ったこと、自身の亡命体験などが加わって「祖国」は様々な意味を包含することにもなるのだ<sup>(113)</sup>。<sup>(113)</sup>

しかし『精髓』では、より踏み込んで祖国を定義していく。「祖国の本能」に先立つ数章は「動物の本能」、「動物の住処」、「鳥の渡り」、「植物の移動」、「動物的人間」などを論じて、住処としての故郷が本能に根ざしたものであることを説いている。そして自然の摂理によって故郷の存在は不可欠とされる<sup>(114)</sup>。いかえれば祖国ないしは故郷への愛着もまた摂理よって生起する感情に他ならない。人間にとって祖国ないしは故郷とは各々が生まれ育った土地であり、幼児体験、肉親との具体的な触れあい、些細な事柄の思い出などと深く結びつき、その記憶は喚起されて消え去ることがないのである。この著作では何より情念的側面が強調されているといえるだろう。そして各々の祖国愛ないしは郷土愛は、キリスト教的世界秩序の中に正統な位置を占めるものとして擁護されることになる。

しかるに、既に『試論』においても明らかであったように、『精髓』が読者と共有する故郷として示すのはまたしてもフランスなのである。恐怖政治期にフランスから追われ、ライン河中央に船を浮かべて両岸からの迫害を逃れた家族の挿話を、著者は紹介する。彼らは上陸することもままならず、祖国フランスから吹き寄せた風<sup>(115)</sup>に僅かに慰めを見出していたのだ<sup>(115)</sup>。いわば故郷概念が矛盾なく拡大される形で、フランスもまた個人<sup>(115)</sup>の記憶と結びつき、個人的愛着の対象として認定されるのである。その祖国は、革命という国家規模の変動のために、激しく揺り動かされていた。その結果、亡命を通して体験された個人的受苦は、必然的に政治的次元の問題としてとらえられるようになる。帰還すべき土地は一地方に限定されぬ国の枠組みの中に位置し、再

興すべき社会はいまやそこへの帰属が失われた国家としてのフランスと認識されるのである。『精髓』の作者が見出した祖国とは、革命勢力によって否定されてしまった共同体、歴史と伝統に立脚した国家であるといえるに違いない。著者が幼年期から感じていた生地ブルターニュへの愛着は言及されず、それゆえフランス中央との対立関係にも触れられないのである。

『精髓』は政治現象を直接考究はしないものの、時代社会についての言及や暗示に溢れている。例えば哲学の世紀によるヴェルサイユ宮廷文化の退廃、革命によって社会にもたらされた害悪、アンドレ・シェニエの処刑、恐怖政治の惨禍など<sup>(116)</sup>。審美的宗教論は、反哲学的立場を経由して革命を批判し、政治的性格を帯びていくことになる。

作者が抱いていたフランスの政治および社会へ参加しようとする意志は、『精髓』第二版では第一執政ポナパルトへの献辞によって明白に表現される。

「諸国民があなたを注目しております。フランスはあなたの勝利によって偉大になり、あなたが宗教の上<sup>(117)</sup>に国家と御身の隆盛の礎を定めてからというもの、希望をあなたに託しております。」

カトリシズムと政治とが不可避的に関係づけられること、つまり著作が獲得することになる政治的射程を、少なくとも一八〇三年に、シャトブリアンは認識していたのである。『精髓』が実際いかなる社会的政治的意味を持つに至ったかは、全集版序文が一八二六年の時点から、回顧して次のようにも説明する。

「古代習俗の記憶、栄光、歴代国王の記念碑などに溢れた『キリスト教精髓』は旧君主制のすべてを志向するものであった。私がベールを持ち上げて見せた聖域の奥に、いわば正統な継承者が隠されていた<sup>(118)</sup>のであり、聖ルイの神を祀る祭壇の上には、聖ルイの王冠がかかっていたのである。」

審美的見地からとはいえ歴史や伝統を肯定し、それらに裏付けられた価値や感情を称揚すれば、それが政治的に旧体制復興を志向することになるのは論理的必然でもあった。

また後年の文章ではあるが

「なぜフランス共和国は須臾の間しか存在しえなかったか。現在を過去から切り離し、土台のない建造物を構築し、宗教を根絶し、法を完全に一新し、言語さえも変更しようとしたからである。<sup>(119)</sup>」

として、世襲による君主制を「疑いもなく最良のもの」と彼は断ずるであろう。つまり伝統や文化を政治体制と不可分なものとして規定するのである。ただし世襲君主制を最良と認定したとしても、シャトブリアンは単純に旧体制への回帰を夢見ていた訳ではない。君主制の枠組みを尊重しつつ、彼の立場はよりリベラルなものに違いなかった。<sup>(120)</sup>

このような国家と歴史伝統の関係によって、彼自身の存在もまた明確に規定される。歴史および伝統との関係において国家が位置づけられれば、同様に歴史と伝統の中に生きる個人はそのような国家に帰属することになる。その成員である彼の社会的責務もまた明白になるであろう。以後シャトブリアンが積極的に社会に参加していった理由である。

\* \* \*

復権を果たしたシャトブリアンは自己の社会的同一性を確立し、揺るぎない国家としての祖国像をも獲得する。いわばフランス人になりおさせたシャトブリアンの帰属意識がいかなるものであったかを、最後に瞥見し

ておくことにする。

彼が帝政期に自己の帰属をどのように考えていたかは、初めに述べたナポレオンに対する言説からも明らかであろう。<sup>(121)</sup> 皇帝を「外国人」として排斥しようとする意識の裏には、政治的文化的次元における国家フランスに自己が帰属しているという確信が存在しているであろう。したがって、たとえ皇帝と敵対して下野しようとも、シャトブリアンの帰属意識が驕ることはなかった。

例えば、一八一一年に刊行される『パリからエルサレムへの旅行記』(以下『旅行記』と略記<sup>(122)</sup>)は、古代文明の中に身を置いた作者の祖国観を説明して、それまでのシャトブリアンの異国体験とは明確な相違を示している。海を渡り、あるいは野宿をして旅行者が回想するアメリカ行こそは、このエルサレム行の対極に位置づけられる。新大陸を旅人がさまよったとき、彼は新奇な世界に出会うことだけを考慮していたし、登場人物たるルネは祖国からの流謫を自己に課して、いずれも異質空間への移動という意味を含んでいた。しかるに、キリスト教文明の起源への回帰ともいべきエルサレムへの旅程は、安らぎと喜悦にさえ満ちている。文中に繰り返される「祖国」という言葉の多くは古代の人物と結びついて、懐疑的要素はない。もちろん作者が旅立ったフランスもまた「祖国」の名の下に喚起される。しかし横断していく空間は、キリスト教世界の始源に向かうという点において均質であって、彼は自己が帰属する世界の中心に戻っていくのである。旅行者は故国および世界との確実な紐帯を維持しており、その関係の確認こそが旅行の目的であったとさえいえるだろう。

ナポレオン帝国が崩壊しブルボン王朝の復興が果たされると、シャトブリアンは、少なくとも一時的には、あるべき社会が到来したものととして新体制を歓迎する。一八一四年に執筆された『政治論考』には王政復古によってもたらされた「憲章」を評価して次のように記す。

「稀有な寵愛や目覚ましい勲がなければ、ガスコーニュやブルターニュの青年貴族が旧体制下でフランス軍の大佐や将軍や元帥になることができたであろうか。もし、なけなしの財産をはたいて、仕事を何か得ようと頼み込みにパリに出かけていったところで、はたして宮廷に行くことができたであろうか。

(……) 一言で言えば、田舎の貧乏貴族など不実で軽薄な社会の目にどう映っていたというのだろう。

(……) そのような軽蔑の時代は去った。今やあなた方貴族は、地方で家名に結びつけられている確たる尊敬をどこでも享受することができる。パリでは、国王の宮殿に参内するだけではなく、どこへなりと入っていきけるのだ。新しく偉大な経歴があなた方の前に開かれるだろう。<sup>(123)</sup>」

地方蔑視の悪弊が払拭されて、地方人にも中央参画の可能性が与えられたこと。それは彼の出自が社会的可能性を阻害せず、愛郷心と愛国心が齟齬を引き起こすことなく連続しうる状況であった。彼は新しい社会制度とわりわけ憲章を、伝統の継承である正統王権と歴史的必然であるとする自由主義的要素が融合したものと肯定するのである。

このような新たな枠組みの中でフランスは次のように定義されて、ヘルダーやフィヒテの所論をも想起させる。

「どのような論議がなされようと、ある王国の本来的版図は決して地理的境界によってではなく、風俗と言語の一致によって決定される。フランス語を話さなくなった地点でフランスは終わるのである。<sup>(124)</sup>」

いかえれば彼はフランス語が使用されている均質な空間としてのフランスを想定して、自己をそこに位置づけるのである。もはや地方差は意味を持たない。さらに文化的伝統を基礎とする国の存在が、国王の正統性を承認し、あるいは逆に国王の正統性によって確認されるものであることは説明するまでもない。いわく、

「国王への愛と、祖国への愛、憲章への愛着が今後はわれわれの公共精神を形作らんことを。」<sup>(125)</sup>

少なくとも王政復古期の初期、シャトブリアンが国家フランスに対して肯定的な帰属意識を所有していたことは疑いえない。当時、国家フランスが中央集権的体制によって組織されていたことを忘れてはならないであろう。シャトブリアンは、ベルリン、ロンドン、ローマと大使を歴任して、「偉大なフランス」の擁護者を自認する。一八二二年には外務大臣の地位を得ると、ヴェ罗纳会議へ参加し、スペインへの軍事介入を決行させる<sup>(126)</sup>。それはナポレオンに匹敵する武勲を挙げようとする彼の野心の表明でもあった。ただし首相との確執から一八二四年にその職を罷免されると、彼は野党右派の驍将として論陣を張ることになるのだ<sup>(127)</sup>。

しかし状況の変化はこの愛国者に新たな苦難を強いるであろう。一八三〇年からの七月王政は正統王権を消滅させ、祖国と彼との距離は決定的になる。時代との断絶はシャトブリアンに対して、「墓の彼方」に、いわば失われた時に帰属する存在として自己を規定させる。空間ならぬ時間において、終わることのない流謫が始まるのである。彼はあたかも異邦人であるかのように時代という荒野に対峙する。

一八三六年、シャトブリアンはミルトンの『失樂園』を翻訳、出版する。亡命時代から彼はこの作品に読み親しんでおり<sup>(128)</sup>、樂園喪失の主題がいかに内奥の葛藤に呼応するものであったかが理解される。とりわけその末尾は、新しい時代を前にして喪失感と共に歩み出さなければならなかった彼の心象風景を象徴しているかに思われる。

「安住の地を探すべき、全世界が彼らの前に広がっていた。そして摂理が彼らの導き手であった。手に手を取って、おぼつかない足取りで、ゆっくりと、エデンを通り、彼らは二人だけの道を歩んでいった。」<sup>(129)</sup>



しかし訳者がその歩みを止めて、故郷サン・マロに帰還するまでには、まだ長い時間が流れなければならなかった。

註(1) 現在シャトブリアンの政治的側面の研究では第一人者であるジャン＝ポール・クレマンの見解が代表であろう。Jean-Paul Clément, *Chateaubriand politique*, Hachette (Pluriel), 1987; “Chateaubriand et la Contre-Révolution, ou la liberté sur le pavois”, in *La Contre-Révolution, origine, histoire, postérité*, éd. par Jean Tulard, Perrin, 1990, pp. 325-347. また同氏によるシャトブリアンの知的側面に関する評伝は整然とした記述できわめて有益である。Chateaubriand, *biographie morale et intellectuelle*, Flammarion, 1998. なおシャトブリアン研究書誌はPierre H. Dubé et Ann Dubé, *Bibliographie de la critique sur François-René de Chateaubriand 1801-1986*, Nizet, 1988. それ以降のものについては諸著作に付された参考文献表などを参照した。

(2) *Proposition relative au bannissement de Charles X*, 1831, in *Grands écrits politiques*, présenté par J.-P. Clément, Imprimerie nationale, 1993, t. II, p. 655.

(3) “Préface générale”, *Œuvres complètes*, Ladvocat, 1826 (référence désormais abrégée en: OC), t. XVI, p. xxij sq.

(4) ただし「コルシカ人」という表現が初版に類出して、再版以降削除されるのは、ナポレオンの退位が現実のものになり王政が復古することによって、著者がフランスの現実を、その版図を含めて肯定的に受容することができるようになったからであろうか。もはやコルシカをフランスにおける異郷として排し続けるには当たらない。コルシカがイタリアであった時代に生まれて、シャトブリアンによれば「偽って」フランス人となったナポレオンが外国人であることが確認できれば十分なのであった。同様なナポレオンへの非難は回想的文章の中でも開陳されているが、それは著者自身の帰属の正統性を強調するものに他ならない。

(5) ブルターニョの歴史についてはArmand du Chatellier, *Histoire de la Révolution en Bretagne*, Morvan, 1977 (éd. orig. 1836); Yann Breklien, *Histoire de la Bretagne*, Hachette, 1977; Jean Kerhervé (éd.), *Noblesse de*

*Bretagne du moyen âge à nos jours*, Presses Universitaires de Rennes, 1999. 以下を参照した。

- (9) *Mémoires d'outre-tombe*, nouvelle édition critique. établie, présentée et annotée par Jean-Claude Berchet, Classiques Garnier, 4 vol., 1989-1998, (référence désormais abrégée en: MOT), t.I, p.667 sq. (3e partie, livre XIX). 以下を参照した。Ed. par Maurice Levaillant, Pléiade, 2vol., 1962; Ed. par Pierre Clarac, Librairie Générale Française, 1973, 3vol. 以下を参照した。
- (10) この聖蹟についてその名の由来をたずねた。Jean-Pierre Richard, *Paysage de Chateaubriand*, Seuil, 1967; Maija Lehtonen, "Chateaubriand et le thème de la mer", in *Cahiers de l'Association internationale des études françaises*, No.21, 1968, pp.193-208; Marie Pinel, *La mer et le sacré chez Chateaubriand*, Claude Alziou, 1993.
- (11) この聖蹟についてその著作が持つ意義は何か。André Vial, *Chateaubriand et le temps perdu*, 10/18, 1963; Manuel de Diéguez, *Chateaubriand ou le poète face à l'Histoire*, Plon, 1963; Hans Peter Lund, *François-René de Chateaubriand, Mémoires d'outre-tombe*, PUF, 1986.
- (12) *Mémoires de ma vie*, Livre III, in MOT, t.I, p.81.
- (13) 一巻の終末部分にチャートマンの日記断片について『回覧』の聖蹟について。André Maurois, *René ou la vie de Chateaubriand*, Grasset, 1985 (éd. orig. 1956); George Painter, *Chateaubriand, une biographie, les orages désirés*, traduit par Suzanne Nétilard, Gallimard, 1977; Ghislain de Diesbach, *Chateaubriand*, Perrin, 1995.
- (14) *Mémoires de ma vie*, Livre I, chap.1, in MOT, t.I, p.132.
- (15) Y. Brekilien, *op.cit.*, pp.284-296.
- (16) *Ibid.*, p.301.
- (17) ヤントは博物館にチャートマン家の遺跡を観察して見た。その文はチャートマン日記の引用である。MOT, t. I, p.626. Cf. Jean Markale, *Chateaubriand au-delà du miroir*, Imago, 1986, pp.22-23.
- (18) MOT, Livre IV, chap.6, p.255.

- (16) *Mémoires de ma vie*, Livre I, in *MOT*, t.I, p.12.
- (17) 宮廷に対する反感は、たとえば一八三一年に書かれた『フランス史体系的分析』にもなお明瞭に現れることになる。  
*Analyse raisonnée de l'histoire de France*, in *OC*, t. V bis, pp.306-307. けれどもその感情は彼自身が国王および国家に対して抱く忠誠心を阻害するものではなかった。
- (18) シャトブリアンは革命における国王個人の非を認めさせず。なお彼の変容を跡づけることを可能にするような一七八九年以前に書かれた文章・書簡は残されていない。
- (19) *MOT*, Livre 5, chap.7, t.I, p.303.
- (20) *Lettre à Louis Châtenet*, 28 mars 1789, *Correspondance générale*, Gallimard, (référence désormais abrégée en: *CG.*), 1977, t.I, p.46. これはアメリカ島嶼部へ父親が残した財産を回収する必要が生じたためであろうかとの推測もあろう。G. Collas, *René-Auguste de Chateaubriand, comte de Combourg (1718-1786)*, Nizet, 1949, p.253. しかし新世界で彼が財産回収を行ったという記録はなく、『回想』や『アメリカ旅行記』などにもその記述はない。
- (21) *Lettre à Pierre-Felix de La Morandais*, 9 et 12 mars 1790, *C.G.*, t.I, p.49 もよろしく緊迫した情勢、貴族に対する具体的脅威を考えれば、彼の信条がすべて書簡に表われていることはあり得ない。
- (22) Abel-François Villemain, *La Tribune moderne I, M. de Chateaubriand, sa vie, ses écrits, son influence littéraire et politique sur son temps*, Michel Lévy, 1858, p.36.
- (23) 一八二七年に刊行される『アメリカ旅行記』では、より政治的な説明が施されている。「私がフランスを発った一七九一年初頭、革命は急速な進展を見せていた。それが依拠する原則は支持できたが、すでに革命を汚してしまった暴力は唾棄すべきものだった。自分の嗜好にも合い、性格にも適った独立を求めて行くのは、心が弾んだ。当時、亡命の動きが加速していた。しかし戦うことがない以上、いかなる名誉の感情を持ってしても、自分の理性が示すところに逆らって、コブレンツの狂騒に身を投じることはできなかった。より賢明な亡命とは、オハイオの河畔に向かうものだった。」*Voyage en Amérique, in Œuvres romanesques et voyages, texte établi, présenté et annoté par Maurice Regard, Pléiade*, 2vol., 1969 (référence désormais abrégée en: *ORV*), t.I, p.667. また『回想』の中では、「我が国の運命にも、私自身の運命にも不安を抱いたまま、旅立っていくのであった。フランスと私のどちらかが滅びることになるのである

うか。私はフランスと、家族とはたして再会できるのであるうか。」MOT, t.I, p.333. と記されている。けれどもアメリカへ向けて出発した時点で、シャトブリアンがフランスを祖国と思い定め、あるいはフランス革命に対して明確な意見を持っていた確証はない。いずれも後年の政治化された意識からの遡行的な叙述と見るべきであろう。

(24) MOT, Livre V, chap.15, t.I, p.331. Cf. J.-P. Clément, *op.cit.*

(25) マルゼルブの娘がロザンボに嫁ぎ、その娘がやがてシャトブリアンの兄ジャン＝バチストと結婚する。

(26) 後年第一執政にあてた亡命者名簿からの名前を抹消するための上申書など (Lettre au général Bonaparte, [mai 1801]; Lettre à Elisa Bacciochi, [15 mai 1801], C.G., t.I, p.134 et p.135) では、アメリカ渡航の目的を「マルゼルブの忠告によってアメリカ北部探検を試みた」とか、「マルゼルブ氏の弟子としてフランスを出国、探検を敢行した」などと、政治的意図が不在であったことを強調している。しかし一八〇一年当時の至上命題がフランスへの帰国であって、そのためには身辺からあらゆる政治色を消去する必要があったことを考えれば、むしろ装われた純真さとして割り引いて考えることが必要であろう。なお国王の弁護人を引き受けて、断頭台に散ったこの知識人にして政治家の生涯については以下の著作を参照した。Christian Bazin, *Malsherbes ou la sagesse des Lumières*, Jean Picollec, 1995. またシャトブリアンとの関係については、Pierre Clarac, *A la recherche de Chateaubriand*, Nizet, 1975, pp.211-215. アメリカから帰還したシャトブリアンに再度の探検を勧めたことについては、当時の社会情勢からいって疑問とする声もある。Ex. Raymond Lebêche, *op.cit.* ただし『革命試論』には当初の「第一次行」の予定が五、六年であったこと、重ねての探検を想像していたことが記されている。Essai, in *Essai sur les révolutions, Génie du christianisme*, texte établi, présenté et annoté par Maurice Regard, Pléiade, 1978 (désormais cité: EG), p.352 sq.

(27) アメリカから帰国したシャトブリアンがこの兄と亡命行を共にしたことは、彼の状況認識をより現実的、あるいは悲劇的なものにする上で少なからぬ影響があったと推測される。しかしこのほぼ一〇才年長の肉親に対してシャトブリアンは強い反感を抱いていた。両親とりわけ母親の愛情と期待を一身に受けていた兄と疎外されていた末弟という関係はその感情の由来を説明するであろう。兄の助力によって、フランソワ＝ルネはヴェルサイユ参内を果たすが、それも宮廷における兄自身の利益のためであったときわめて冷淡に言及されるに過ぎず、弟の反感をより強固にするものでしかない。また戦傷を負ってたどり着いたブリュッセルで兄弟は再会を果たすが、それすら何の感動もなく記されて、この兄は『回想』か

- ら姿を消す。一七九四年には反革命の急先鋒として斬首処刑されているにもかかわらず、その事実が感情を交えて説明されることはない。『我が人生の回想』は「兄は断頭台で果てた。」*Mémoires de ma vie*, Livre I, in *MOT*, t.I, p. 11と触れるのみである。ましてそれが、母親の最期のように、回心を引き起こすこともない。
- (28) 『ルネ』ではこの情念は姉に対する近親相姦的感情に擬せられる。それは『キリスト教精髄』では「情熱の曖昧さ」と題する章の中では模糊とした情念の高まりとして説明されることになるのだった。
- (29) 上記注(25)参照。
- (30) シャトブリアンのアメリカ体験については各種版本に付せられた解説の他、特に次のものを参照した。Gilbert Chinard, *L'exotisme américain dans l'œuvre de Chateaubriand*, Slakine, 1970 (éd. orig. 1918); Raymond Lebègue, *Aspects de Chateaubriand -- Vie-- Voyage en Amérique--Œuvres*, Nizet, 1979.
- (31) Lettre à Chrétien-Guillaume de Lamignon de Malesherbes, 1791, C.G., t.I, p. 61.
- (32) 『書簡集』はアメリカ滞在後、一七九四年八月に至るまで空白が続けている。書簡の紛失ないしは破棄を示すものである。そして一七九四年以降彼の書簡は亡命者の急迫と悲惨を強調するものになる。この点『回想』の記述と大きく変わる点にはなる。
- (33) Raymond Lebègue, *op.cit.* なおシャトブリアンとルノーないしは一八世紀思想の関連についてはRobert Shackleton, "Chateaubriand and the eighteenth century", in *Chateaubriand, Actes du colloque de Wisconsin*, Droz, 1970; Arnold Ages, "Chateaubriand and the Philosophes", *ibid.*; Marc Fumaroli, "Chateaubriand et Rousseau", in *Chateaubriand, le tremblement de temps*, Cribles, 1994など簡潔にまとめられている。
- (34) *MOT*, livre VI, chap. 7, t.I, pp. 372-377.
- (35) *MOT*, livre VII, chap. 10, t.I, p. 417.
- (36) 『回想』の文章は多くはそのままの形で『アメリカ旅行記』へ流用されているが、いずれも冒険行を美化する傾向を示しているだけに、そこに記された感情は青年の実感として信ずるに足るものであろう。ただし、この落胆にもかかわらず、政治的実験としての新生合衆国は常に彼の関心を引き続ける。ワシントンとの会見を後年吹聴することになるのは、現実のアメリカ社会に評価すべき側面を見いださえず何の足跡を残せなかったこと、つまりアメリカ行によって目に見える功

續ぎ挙げざるか。たゞこの代償として考えようがどうなるかも知れない。

- (37) *Essai*, Ile partie, chap. LVII, in *EG*, p. 442.
- (38) *MOT*, Livre VIII, chap. 5, t. I, p. 448.
- (39) *Voyage en Amérique*, in *ORV*, t. I, p. 887.
- (40) Cf. Henri Forneron, *Histoire générale des émigrés pendant la Révolution française*, AMS, 1976 (éd. orig. 1884); Ghislain de Diesbach, *Histoire de l'émigration*, Perrin, 1984.
- (41) *MOT*, Livre 9, chap. 3, t. I, p. 480 sq.
- (42) 例へば André Maurois, *op. cit.*, p. 47.
- (43) 例へば Raymond Lebègue, *op. cit.*, p. 58; Ghislain de Diesbach, *Chateaubriand*, p. 80 などの主張もある。しかしこの説は立派な父親の遺産回収が主のものと説明されるのである。彼が出發資金をよび調達したかは説明されていないものの『回想』で資金不足については言及されていない。 Voir *MOT*, Livre 8, chap. 7, t. I, p. 465. また帰国に当たってはフランス到着後母親にその費用を弁済しようとしたことが記されている。
- (44) Cf. Louis Martin-Chauffier, *Chateaubriand ou l'obsession de la pureté*, Gallimard, 1943, p. 53.
- (45) *Voyage en Amérique*, in *ORV*, pp. 887-888.
- (46) *MOT*, livre IX, chap. 5, t. I, p. 493.
- (47) *Ibid*, Livre IX, chap. 6, t. I, p. 497. 吟味を必要とするのは、帰国時に青年が国王の側に立つことを明確に決意していたか、あるいはそれをせむべき現実のこととして期待していたかであろう。すなわち党派的立場を鮮明にせず、はたして国王を支持しているものでもないか。
- (48) *Ibid*, Livre IX, chap. 5, t. I, p. 494.
- (49) Cf. Henri Forneron, *op. cit.*, t. I, p. 217 sq.; Jacques Godechot, *La Contre-Révolution*, PUF, 1961. 『回想』もまた次のように記している。「今日この命者に対しては「母の乳房を食うべき獣だ」と責める声がかまびすしい。しかし私が見ている時代では、古来からの規範に従順で、名誉は祖国と同様重要とされていた。」 *MOT*, livre IX, chap. 8, p. 506. たゞこの命者たちにとって名誉と同時に「祖国」も存在していたかどうかにについては議論が分かれるところであろう。

の一節もまた遡行的記述によるアナクロニズムであろうか。

- (50) *Mémoires de ma vie*, Livre II, in *MOT*, t.1, p.47.
- (51) 正しくは *Essai historique, politique et moral sur les révolutions anciennes et modernes, considérées dans leurs rapports avec la Révolution française* すなわち『フランス革命との関連において考察した古今の革命に関する歴史的、政治的、道徳的試論』。上記注(25)を参照のこと。
- (52) 上記注(9)を参照のこと。
- (53) 革命政府は亡命者を処罰する法律を次々に制定して行くであろう。シャトブリアン自身も亡命者と認定されて、フランスへは偽名で帰国することを余儀なくされる。 Voir Fornemon, *op.cit.*
- (54) ただし貴族の組織的な亡命が宮廷生活やパリのサロンを丸ごと移動させたに過ぎなかったことについては批判的な感懐を抱かせずにいられない。亡命貴族の軽薄さと時代認識の欠如は、次第に彼の心をいらだたせる。『回想』にはコブレンツに集結した反革命軍に対する容赦ない批判が展開されている。 *MOT*, Livre IX, chap.8, t.1, p.504.
- (55) この問題を検証したものとしては、例えば Anatole Le Braz, *Au pays d'exil de Chateaubriand*, Champion, 1909. またイギリスにおけるフランス亡命者については特に Kirsty Carpenter, *Refugees of the French Revolution, emigrants in London, 1789-1802*, Macmillan, 1999などが参考になった。
- (56) 例えば、「テミストクレスはロベスピエールである。」 *Essai*, in *EG*, p.276. などという断定が連続する。
- (57) *Essai*, in *EG*, p.37. この「私」の遍在については一八二六年の注記によっても、「おぞましく」と断せられている (*Ibid.*, p.42.)。
- (58) しかしこのような混乱にはなにかしらの魅力があるに違いないとする開き直りにも似た自賛にも、時代を隔てれば、ある真実が含まれているといえるかもしれない。一八二六年、全集収録時には「序文」と煩瑣なまでの「新版注記」が付け加えられて、文人政治家として盛名をえた作者が一七九七年の初版を批判解説することになる。そこには若書きの作品に対する羞恥と強弁が、反省と執着が同居しているように観察される。「文学的にいえば、この本はおぞましく、完全に滑稽である。」「*Préface*», *Génie*, in *EG*, p.15. 「この作品は全き混沌である。それぞれの言葉がつぎに続く言葉と矛盾を引き起こしている。」 *Ibid.*, p.20. 「しかしそこには、不幸によって打ちひしがれたというよりも、感奮興起し、全霊が国王

と名譽と祖国とに捧げられた青年の姿が認められるであろう。」*Ibid.*, p.15. (そのほか初版刊行と全集版刊行の間には連続と断絶が存在しているのである。連続を保証するのが作者の自我であることはいうまでもない。「革命試論」と『回想』との関係について、とりわけ作者の意識、テキストの構造などに関する類似については以下のものを参照のこと。Jean Mourot, *Etudes sur les premières œuvres de Chateaubriand*, Nizet, 1962, “L’Essai sur les Révolutions ou déjà les *Mémoires d’outre-tombe*”, pp.181-216. しかしながら上記のようは国王への献身に言及するところ、その政治的問題に関する場合、作者は明らかに『精髓』以後の時期に身を置いているといわなければならないだろう。

- (66) *Essai*, in *EG*,, p.338-339.
- (67) *Ibid.*, p.84.
- (68) この葛藤は後年克服されて、「自由の友、革命の敵、これこそ私が生涯にわたって、どこにおいてでも示してきた姿である。」*Note de la nouvelle édition, Essai*, in *EG*, p.282. と自身の立場を定義するようになる。『精髓』によつて宣言されるキリスト教への回心は、無神論から信仰への転換ではなく、懐疑から確信への転換なのである。Cf. *MOT*, Livre XI, chap.4, t.I, p.604.)『試論』と『精髓』の関係については前注を参照のこと。
- (69) *Essai*, in *EG*, p.267. 『精髓』に記される、ロマン主義のマニフェストともいうべき「情熱の曖昧や」*Génie*, 2 partie, livre III, chap. IXが、そのこの時点で明瞭な表現をよびだしたのである。
- (70) *Essai*, in *EG*, p.267. この『革命試論』は九五年からの執筆という时期的な要因も重なって、作者のアメリカ体験をも盛り込むものになつてくる。あるいは体験がようやく明確な意味を持ち始めたともいえるだろう。
- (71) Cf. Gérard Gengembre, *La contre-révolution ou l’histoire désespérante*, Imago, 1989, p.61.
- (72) *Essai*, Ire partie, chap. XI, in *EG*, p.77.
- (73) *Ibid.*, Ire partie, chap. VIII, p.289.
- (74) 「全集版注記」もまた執筆時の作者や著作「亡命者」について規定する。*Ibid.*, Ire partie, chap. LVI, p.441.
- (75) *Ibid.*, Ire partie, chap. VIII, p.292.
- (76) *Ibid.*, “Notice” (1797), p.37.
- (77) *Ibid.*, Ire partie, chap. XXI, p.341.



- (71) *Ibid.*, Ire partie, chap. IX, p. 73.
- (72) *Ibid.*, Ire partie, chap. LXIII, p. 230.
- (73) それがためにか全集版は上記引用箇所に注記を付して、作者の困惑を隠さない。「この文によって何を意図していたかと訊ねられても、なんと答えてよいものか。しかしこの文がこのままであっても、不快ではない。私が今この文を理解しているとはいえないまでも、共感はできるのである。」*Ibid.*, Ire partie, chap. LXIII, p. 231. 本来革命勢力側の大義であった祖國が、反革命側にも浸透して、政治的立場に関わらぬ普遍的観念として成立してしまったことに対する反省であろうか。あるいは亡命者が大義として奉じる名誉と祖國の間に不可避的に露わになる矛盾を感じ取ったことであろうか。
- (74) *Ibid.*, Ire partie, chap. XVII, p. 329.
- (75) *Ibid.*
- (76) *Ibid.*, Ire partie, chap. XII, p. 307.
- (77) *Ibid.*, Ire partie, chap. XVII.
- (78) *Ibid.*, Ire partie, chap. XIII, pp. 309-3318.
- (79) *Ibid.*, p. 316. ただし全集版注記は作者が自然ではなく、人間社会における孤独を選び取ったことが示す。彼の社会ないしは政治参加の決意は『試論』執筆後になされたのである。
- (80) Lettre à Jean-Gabriel Peltier, vers 10 juillet 1797, C. G., t. I., p. 78.
- (81) Lettre à Amable de Baudus, 5 avril 1799, *ibid.*, p. 90.
- (82) 『精髓』初版序文 *Génie*, in *EG*, p. 1282. この文は『回想』にも再録されて、彼の精神遍歴における最も重要な展開として位置づけられている。
- (83) シャトブリヤンの讒古を検証するものとして、Pierre Moreau, *La conversion de Chateaubriand*, Felix Alcan, 1938. が事実をよく整理して示している。政治的文化的立場を全く異とする新たな著作を世に問うためには、作者の変貌姿を印象づける必要があったのである。
- (84) Lettre à Fontanes, août 1799, CG, t. I., p. 94.
- (85) *MOT*, Livre XII, chap. 6, t. I., p. 647.

(86) Lettre à M. de Fontanes, 22 décembre 1800, in *EG*, pp.1265-1280.

(87) 『アタラ』に取材して演劇、バレエ、オペラなどが数多く作られ、一八〇八年のサロンにはジロデの有名な絵画『アタラの埋葬』が出品される。また女兒にはアタラの名を付けるのが流行したとも伝えられる。Gérard Gengembre, “Preface”, in Chateaubriand, *Atala*, René, Pocket, 1996, pp.8-10.

(88) この作品の成立過程は正確に判明しているわけではない。ティオンヴィルでの戦闘の際、銃弾が分厚い草稿に当たったために、命拾いしたことが『回想』には記されており、作者はアメリカ滞在中に『アタラ』を含む作品群が完成していたことを印象づけようとしている。MOT, Livre IX, chap.9, p.510)かその草稿と刊行されたものとの異同は明らかではない。ヨーロッパ帰還後に作品としての完成を見たと考える方が妥当であろう。とはいえ『試論』刊行から『精髓』刊行に至る時期には現在の形態を取る至ったとする見解 (Gilbert Chinard, *op.cit.*, p.161 sq.; P. Barbéris, *op.cit.*, p.53.) や、数段階の展開を経たと想定するもの (Maurice Regard, “Introduction”, in Chateaubriand, *ORV*, t.I, pp.149-155.) などがある。しかしそれらを総合すると、作品が内容的に成立した過程はおよそ以下のよう推定できであろう。『回想』が説明するように、アメリカから帰還した時点ですでに「第一次草稿」ともいべきものが存在していた (MOT, t.II, Livre XVIII, chap.9, pp.270-276.) が、それは習作の域を出るものではなかった。ロンドン亡命中、一七九三年以降に加筆、改変されて、いわば「第二次草稿」が用意される。ただこれもまだ現在の形態とはほど遠いものであったらしい。一七九八年頃には『精髓』と並行して再度改変されて、翌年には『ルネとセリュタ』という小品を包含する作品『ナチエーズ族』として完成したようである。それは当時シャトブリアンが刊行を打診していたことから裏付けられる。この段階でルソー的自然観が払拭されであろうことは想像に難くない。しかし出版者の同意は得られない。一八〇〇年作者がフランスに帰国する際に、原稿は鞆に入れられたままロンドンに残されて、彼の手元に戻るのには実に一八一六年のことになる。作品は、一八二六年、全集に収録されてようやく公になるが、その時にも手を入れたであろうことは想像に難くない。しかし独立した出版でなかったことが既に作者と作品の関係がいわば冷却していたことを説明する。若書きの作品を全面的に改変して、老文人の新作に変貌させることはできなかったのであろう。『回想』によれば、若々しい青春の息吹を消し去ることを危惧して、修正の筆を加えることを断念したとも説明される (MOT, Livre XVIII, chap.9, t.II, p.274)。またルネの最期もシャクタスのヨーロッパ体験も、既に刊行されていた二篇の小説によって、その

大筋が紹介されていて、作品内容には変更の余地がなかったからである。実際、作品は往年の文学的流行を伝えるものとして世間に受け入れられている (Maurice Regard, “Accueil de la critique”, in Chateaubriand, ORV, t.I, p.158.)。テキストが章分けされた第一部に対し、そのように整備されていない第二部はとりわけ作品の原初形態を保存しているとも考えられる。前者は未開人ならぬ別種の文明人としてのシャクタスを紹介し、後者は新大陸に渡った後にルネが体験する悲劇を物語る。そして「祖国」という言葉は第二部に類出する。『精髓』刊行直前の、シャトブリアンの想像力を濃厚に再現するものでもなく (Jean-Claude Berchet, “Introduction”, in Chateaubriand, *Les Natchez, Atala, René*, Librairie Générale Française, 1989.)。また『アタラ』『ルネ』の二作品を読み解くためにも『ナチェース族』の理解は必須である。 Cf. Gérard Gengembre, “Préface”, in Chateaubriand, *Atala-René*, Pocket, 1996, p.6. なお一八二六年に刊行された『アメリカ旅行記』も、作者によれば、青年期の草稿に依拠して執筆されたとするが、刊行時における回顧的文章としての性格がより明確であるので、ここでは論じない。 Cf. Maurice Regard, “Introduction”, in Chateaubriand, ORV, t.I., pp.597-610.

- (88) *Atala*, in ORV, t.I, p.58.
- (89) *Ibid.*, p.95.
- (90) *Ibid.*, p.99.
- (91) *René*, in ORV, t.I, p.143.
- (92) *Ibid.*, p.126. Cf. Pierre Barbéris, *Chateaubriand, une réaction au monde moderne*, Larousse, 1976, p.64.
- (93) *Natchez*, in ORV, t.I, p.237.
- (94) たゞその誓ひが実践せられたかどうかは、『アタラ』*Atala*, in ORV, t.I, p.97 『ナチェース族』*Natchez*, in ORV, t.I, p.528には矛盾して、明らかではない。
- (95) *Atala*, Préface, in ORV, t.I, p.18.
- (96) *Natchez*, in ORV, t.I, p.437.
- (97) *Ibid.*, p.424.
- (98) *Ibid.*, p.360.

(100) *Ibid.*, p. 502.

(101) 長老アタリオがフランスの処刑人に言った言葉「私を高くつるせ。息絶えるときに、故郷の木々が目にはいるように。」*Ibid.*, p. 446. は、作者による想像というより、新大陸における習俗の再現であったかもしれない。『アタラ』ではインディアンが遺骸を木材で組み上げた露台に晒して、やがて先祖たちの墓に運んでいったともされる。死に臨んで故郷を強く志向することは民族学的に広く確認されている現象であるともいう。(イーファー・トゥアン、『空間の体験』、筑摩書房、一九九三、「母国への愛着」参照。)しかし作者がそれを祖国愛の発現と捉えていることは明白である。

(102) アメリカは彼にとって特権的位置を占め、『アメリカ旅行記』や晩年まで筆をとりつづけた『回想』では新合衆国建設が民主主義の実験として示されて、著作の中では旧大陸との対比において「異国」としての独自性を獲得していく。様々な幻滅や凡庸な体験にもかかわらずアメリカは、シャトブリアンにとって、故郷および故国を相対化しうる存在となる。

(103) *CG*, t.I, p.133.

(104) *Ibid.*, p.134.

(105) “Préface de la première édition”, *Atala*, in *ORV*, t.I, p. 22.

(106) *Génie du christianisme*, (désormais cité: *Génie*) in *EG*. 上記注(25)参照のこと。ただし随時、初版 *Génie*, Migeret, 1802を参照した。

(107) Jean-Paul Clément, *Chateaubriand, biographie*, p. 218.

(108) 書物刊行の成功をめぐり、様々に工夫を重ねた様子は彼の書簡に明瞭に記されている。たとえば *Lettre à Louis de Fontanes*, 25 oct. 1799, *CG*, t.I, p. 97から99は *Lettre à Amblede Bandus*, 25 oct. 1799, *ibid.*, p. 101. など。『回想』にもたびたび「正に時宜を得て刊行された。」*MOT*, Livre XIII, (10), t.II, p. 58.

(109) 『精髓』は、同時代における宗教を巡る論議に積極的に加わりつづけるものでもあった。Maurice Regard, “Notice”, in *EG*, pp. 1377-1405. など。Paul Bénichou, *Le sacre de l'écrivain*, Corti, 1973. が時代思潮の俯瞰図を示してくれている。ただしシャトブリアンは文人として政治に参加するのではなく、政治家そのものになろうとする意志を抱くようになっている。

(111) *Génie*, in *EG*, p. 1088.

- (111) しかしながらそれはあくまで、「漠然とした」感受性の次元に留まって、彼のあまりに個性的な政治論あるいは政治行動が理解、支持されることはなかつた。
- (112) *Genie*, 1ère partie, livre V, chapitre XIV, in *EG*, pp.595-601. Cf. Jean-Paul Clément, *Chateaubriand politique*, pp.46-49.
- (113) Cf. Jean de Vignerot, *Les deux patries*, Dominique Martin Morin, 1998.
- (114) 理論の基礎と採理を想定する「*Genie*」および採理との合致を示して論証を終了することは時代に広く行われていた。Cf. Gérard Gengembre, *op.cit.*, p.77.)
- (115) *Genie*, in *EG*, p.600.
- (116) 以下を参照のこと。 *Ibid.*, p.799, p.824, p.703, p.600.
- (117) “Dédicace de la deuxième édition”, *Genie*, in *EG*, p.1284.
- (118) “Préface”, *Genie*, in *EG*, p.460.
- (119) *Reflexions politiques*, in *Grands écrits politiques*, t.I, p.180.
- (120) シャトブリヤント時代の関わりについては以下の著作が特に参考になった。Pierre Barbéris, *op.cit.*: Paul Bénichou, *op.cit.*; *Le temps des prophètes*, Gallimard, 1977.
- (121) ただし『精髓』第二版を献じたように、当初はむしろボナパルトに対して好意的であった。状況が一転するのは一八〇四年三月アングアン公暗殺によってブルボン王朝に対するボナパルトの敵意が判明したことによる。なおナポレオンは同年一月に戴冠する。
- (122) *Itinéraire de Paris à Jérusalem et de Jérusalem à Paris*, in *ORV*, t.II.
- (123) *Reflexions politiques*, in *Grands écrits politiques*, t.I, pp.220-221.
- (124) *Ibid.*, p.228. ルターやフイヒテの名は『回想』中でも言及されているが、彼らの民族ないしは国家観とシャトブリヤントの近似あるいは相関については稿を改めて論じることにした。
- (125) *Ibid.*
- (126) 「私のスペイン戦争」 *MOT*, t.III, livre XXVIII, p.125. 『回想』に記されたこの言葉は、自己をナポレオンになぞらえた

自負が表現されたものであろう。

- (127) なお反革命勢力が「言論の自由」を要求したのは、当時の不安定な状況の中で自陣営の政治的意見を主張するための戦術に過ぎなかった。彼らが権力を手中に収めるとにわかには言論統制を強めようとしたことは説明するまでもないだろう。しかるにシャトブリアンの独自性は、反革命勢力に身を置きながら、言論の自由をいわば歴史の必然として認識し、実現しようとしたことにある。彼の政治的立場については以下を参照のこと。J.-P. Clément, *Chateaubriand politique*; Jean-Jacques Chevalier, *Histoire de la pensée politique*, Payot, 1993, pp. 784-790. 後者はシャトブリアンを「分類不能」として取り上げている。なおブルトンとしての特殊性を考えれば、旧体制下ではなによりもまず国王に対立するフロンドとして自己を規定したのに対して、革命勢力との関係においてはその存在がむしろ国王側に位置づけられることになったことは、ブルターニュ貴族層にとっては皮肉なことであった。シャトブリアンにとっては、旧体制批判と同時に、いかにしてその体制を支持、あるいは復興すべきかという矛盾した命題が生じた由縁である。

- (128) *MOT*, t. I, livre XII. 『失樂園』は『精髓』においても論じられている。Genie, IIe partie, livre I, chap. 3参照のこと。ただしその観点は審美的なものではある。

- (129) John Milton, *Le paradis perdu*, traduit par François-René de Chateaubriand, Gallimard, 1995, p. 340. シャトブリアンの翻訳は散文であり、原文に比較するとこの箇所は寂寥感ないしは不安を強調しているといえるだろう。たとえば原文で *wand'ring steps pas incertains* と訳われている。John Milton, *Paradise lost*, Norton & Company, p. 281. を参照。彼と『失樂園』との関係、またアメリカ体験がこの作品の影響下にいかに結晶化していったかなどについては、Jean Gillet, *Le Paradis perdu dans la littérature française de Voltaire à Chateaubriand*, Klincksieck, 1975, chap. XII. を見よ。